

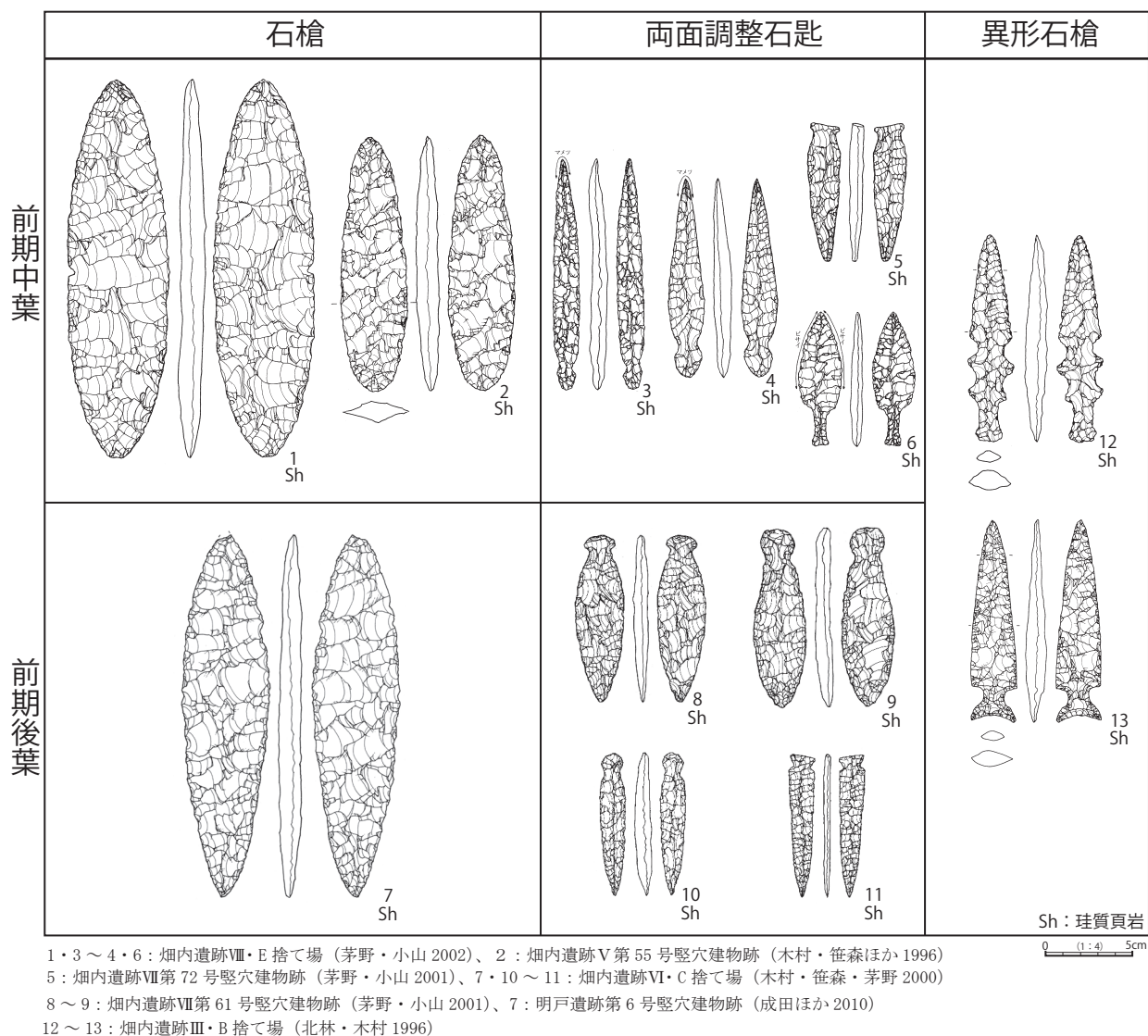


図7 円筒下層式期の石槍・両面調整石匙・異形石槍（北上山地北部）

呼ばれてきたものである。

異形石槍は 23 点 (①出羽山地北部 6 点、②津軽半島 2 点、③青森平野 10 点、④下北半島 1 点、⑤上北平野 0 点、⑥北上山地北部 4 点)、両面調整石匙は 265 点 (①出羽山地北部 6 点、②津軽半島 51 点、③青森平野 22 点、④下北半島 94 点、⑤上北平野 17 点、⑥北上山地北部 75 点) の時期が明瞭に分かる資料を分析対象として集成了。

(3) 東北地方北部における石槍の特徴

円筒下層式の石槍の技術的形態的特徴を整理し

ていくために、円筒下層 a～b 式期の前期中葉と円筒下層 c～d 式期の前期後葉の二大別して検討することとしたい。

東北地方北部の 6 地域すべてで、石槍が出土しており、円筒下層式期の東北地方北部では石槍が石器組成の一つとして共有されていることが確認できた。

各地域、時期ごとの石槍の特徴を見ていくと、柳葉形を基調としている点を読み取れる (図 2～7)。地域や時期に関係なく、共通して細身の石槍が見出させる (図 2-3、図 3-3・6、図 4-1・6、図 6-1、図 7-7 など)。基部の形態は、尖基に近

いもの（図 7-7 など）が中心的であり、円基のもの（図 4-2 など）も確認できる。

一方、大きさについては、時期や地域でやや異なる傾向がある。多くの資料は、最大長が 100 mm 前後、最大幅は 20 ～ 30 mm 程度であるが、最大長 150 mm 程度やそれを上回る資料も存在する。とくに前期前葉では、最大長が 150 mm 前後の大形の資料が散見されるのに対して、前期後葉になると、やや限定的となる。前期後葉では、青森平野や北上山地北部を中心に大形の資料が確認できる。

（4）両面加工石匙・異形石槍の特徴

さらに、石槍と合わせて、両面調整石匙や異形石槍にも目を向けてみたい。そこでは、石槍と共通して、細身を基調とする点が伺える。両面加工の石匙では、中央部が基部に比べて大きくなる幅広の資料（図 4-10）も存在するが、基部と中央部の幅がおおむね共通する資料が中心的である。さらに最大幅が 10 ～ 15 mm と一段と細身を呈する資料も一定数存在し、それらが北上山地北部を中心に確認できる点には注意を要する（図 7- 3 ～ 5、10 ～ 11）。

異形石槍は、太平洋側で、円筒下層式の各細別時期が不明確な資料が多いが、おおむね各地域で確認できる。上北平野では、確認できていないが、細別時期が不明ながらも下北半島では 1 点（図 5-10）、北上山地北部では 2 点（図 7-12・13）出土している。

当該期の異形石槍は、基部側を中心に複数の挟みが入る特徴がある。大きさは、最大長が 100 mm 前後、最大幅は 20 ～ 30 mm 程度で、大形品を除く一般的に確認できる石槍と同程度の資料が多い。そのため、通常サイズの石槍をもとにそこに複数の挟みを入れ、仕上げたものといえる（齋藤 2010）。前期中葉と後葉との時期的な差異は見出しがたく、むしろ遺跡ごとに形態的な多様性がある。

る。

これらを踏まえると、両面調整石匙や異形石槍は、最大長 100 mm 前後と細身を基調とする点から多くの石槍と形態的にも大きさにおいても近い。そのため、石槍を素材として、そこに挟みを入れることで製作していた可能性が高い。

4 円筒下層式期における石槍生産

（1）円筒下層式における石槍の製作工程

円筒下層式期において、両面調整石匙や異形石槍も含めた石槍生産がどの地域で進められているか、読み解いていくために、まずは石槍の製作工程を確認することから始めたい。

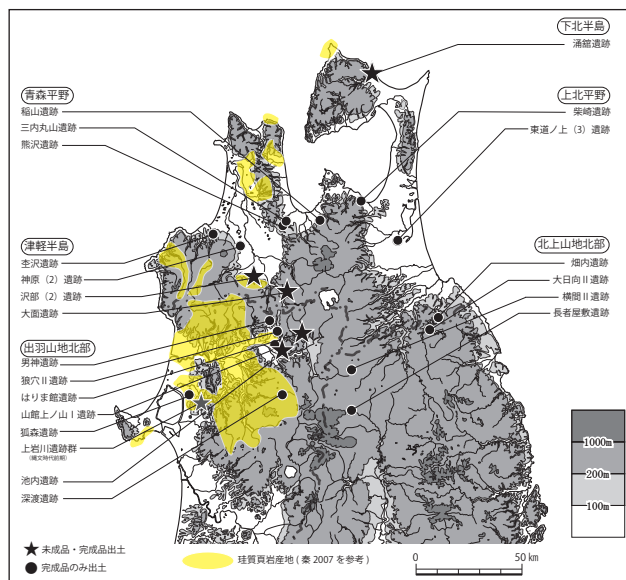
当該地域では石槍の工程を示す接合資料はほぼ得られていない。わずかに山田（2）遺跡の遺構外資料（図 1-3）として確認されているに過ぎない。

当該期の北海道側では、接合資料が複数確認されている。その一つとして、木古内町大平遺跡（中山・鈴木ほか 2016・2017）の接合資料を取り上げ、当該期の石槍の製作過程を読み解いていきたい。

図 1-1 では、最大長 300 mm の扁平な板状の礫をもとにそこから両面にわたって求心状に調整加工を繰り返し行っている。その後、細部加工を施して、最終的に 1 a の石槍に至っている。この個体では、長大な原石が用意されながらも 1 点の石槍しか作られていない。図 1-2 では、拳大より一回り大きな最大長 170 mm の原石を用意し、それを二分割したうえで、扁平な素材の方を用いて、求心状の調整加工を連続的に施して粗割を行い、最終的に細部加工を行うことで、2a のような石槍が作り出されている。

（2）石槍未成品の認定について

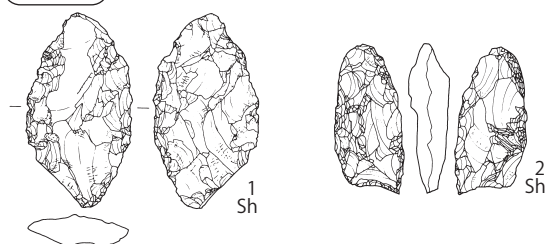
ここまで見てきたように、石槍は板状の原石から両面にわたって繰り返し調整加工を施すこと



未成品・完成品出土遺跡の分布

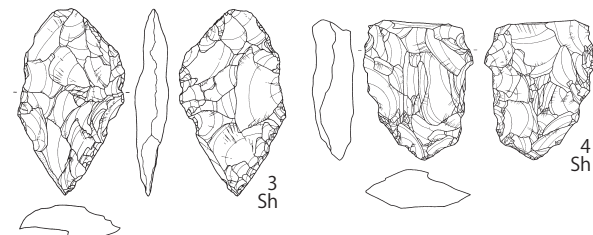
津軽半島

1・2：大面遺跡（円筒下層 a～b 式）（一町田・小笠原 1980）

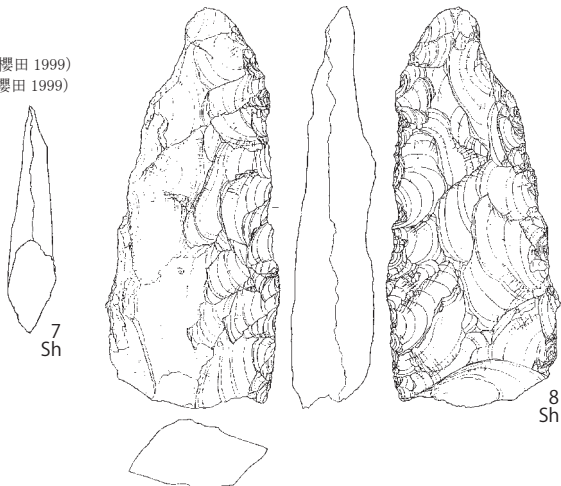


下北半島

3・4：涌館遺跡A区南東部（捨て場A）（円筒下層 a 式主体）（根岸ほか、2012）



8：はりま館遺跡EⅢ区 SI54A（円筒下層 a 式）（小林ほか、1990）



出羽山地北部

5・6：池内遺跡北西部斜面捨て場（円筒下層 b 式主体）（櫻田 1999）

7：池内遺跡 ST156 谷（円筒下層 a～b 式主体）（櫻田 1999）

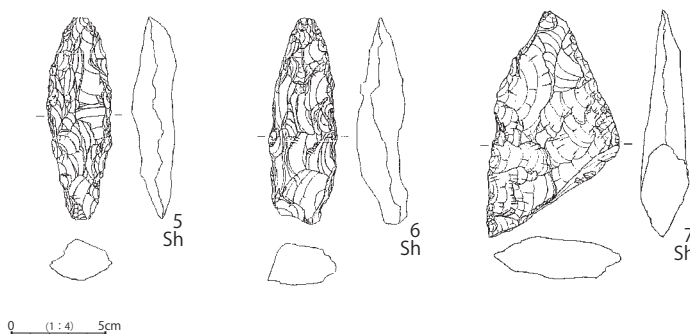


図8 縄文時代前期中葉における未成品とその分布

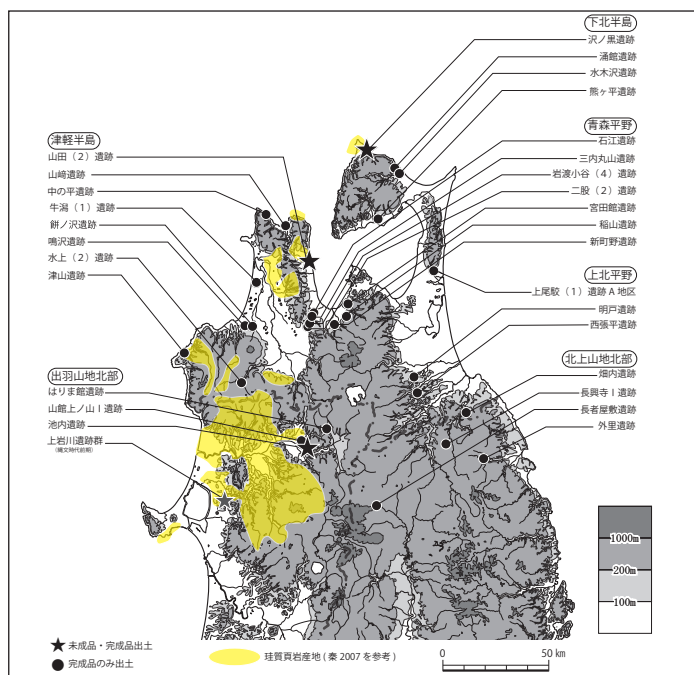
で、ある程度の形を整えた未成品ができ、そこからさらに細部加工を施していくことで、完成品へといたるわけである。そこでは、細部加工を施す前の未成品の段階、細部加工を施した完成品の段階が存在する。

これらをもとにすると、接合資料が欠落しているなかで、石槍の生産がどの地域で行われているか、調べるためには、より製作工程の初期に近い未成品を抽出し、その分布を調べる必要がある。そこで未成品を抽出するための条件を検討した。なお、未成品と完成品は石器製作工程のなかで連続的に見いだせるものなので、明瞭に区別するこ

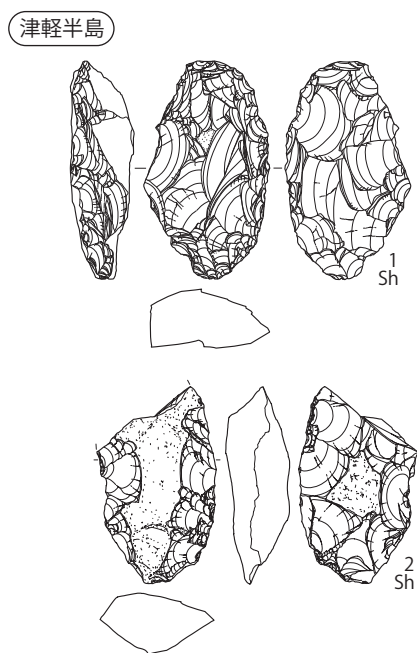
とは困難であるが、①調整加工の粗さ、②平面・断面の形状、③側縁の状態から未成品を区別したい。

①の調整加工が粗い場合は、石槍製作工程の初期に近いと判断される。石槍は先述のとおり繰り返し調整加工を行いながら厚みを減じ、全体の形状を整えていくため、原石の自然面が残る場合や大きな剥離面で構成される場合は、未成品に相当するものと考えられる。

これらと関連して②の断面形状も厚みを減じていく中で断面凸レンズ状に近づいていくことになるが、断面が上下に膨らんだ菱形に近い形状など



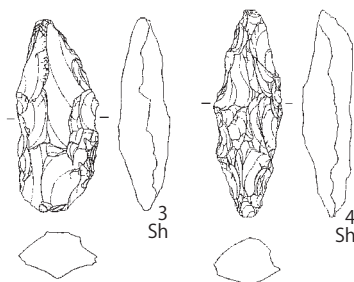
未完成・完成品出土遺跡の分布



1・2：山田（2）遺跡西捨て場（円筒下層 d～上層 a 式）（小田川ほか、2011）

5・6：沢ノ黒遺跡第 1 号捨て場（円筒下層 d 式～上層 a 式）（野村ほか、2007）

出羽山地北部



3・4：池内遺跡 S T 396・504 谷（円筒下層 c～d 式）（櫻田 1999）

下北半島

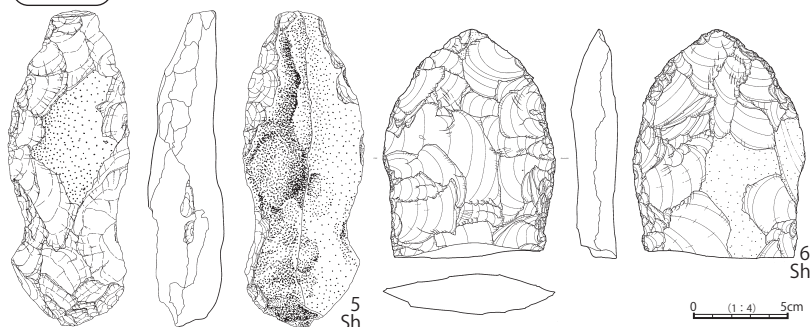


図 9 縄文時代前期後葉における未完成品とその分布

は未完成と判断できる。平面形状も同様に、柳葉形とは異なる草鞋状などは未完成と認定できる。これまで「両面調整石器」とされてきたものである（齋藤 2018）。

また、③の側縁の形状も最終的な細部加工により、直線的な形状に近づくことが想定できることから側縁がジグザグを呈する場合は未完成の可能性はある。

（3）石槍の製作地

これら①～③の条件を組み合わせると、未完成を抽出していくと、未完成が分布する地域は、円筒

下層式期を通じて、出羽山地北部や津軽半島といった日本海側や下北半島の遺跡に限定される（図 8・9）。

出羽山地北部では、前期中葉及び後葉の池内遺跡（図 8-5～7、図 9-3・4）や前期中葉のはりま館遺跡（図 8-8）で未完成が確認されている。図 8-8 は自然面が大きく残され、大きな剥離面で構成されることから粗割を行った状況を示しており、こうした資料が複数確認できる。

当該地域では、珪質頁岩の採掘遺跡も検出されている。秋田県三種町上岩川遺跡群の複数の遺跡で珪質頁岩採掘坑が発見され、少なくとも縄文時

代前期以降に採掘活動が行われていた可能性が報告されている（利部ほか 2008）。そこには、珪質頁岩の原石だけでなく、両面調整が施された未成品も出土している。

津軽半島では、前期中葉の大面遺跡（図 8-1・2）、沢部（2）遺跡、前期後葉～中期初頭の山田（2）遺跡（図 9-1・2）で未成品が残されている。図 9-2 では表裏に自然面が残されており、図 1 と同様に扁平な礫を素材に選択していることが伺える。ほかにも十分な調査は行われていないが、青森県外ヶ浜町大平墓地公園遺跡でも石槍の未成品を含めた石器製作残滓が採集されている（齋藤ほか 2021）。さらに、下北半島でも前期中葉の涌館遺跡（図 8-3・4）や前期後葉の沢ノ黒遺跡（図 9-5・6）において未成品が確認できる。

これらを踏まえると、未成品が出土している遺跡は、珪質頁岩採掘遺跡に代表されるように、珪質頁岩産地周辺に位置している。日本海側を中心に新第三紀中新世後期の女川層に相当する層に珪質頁岩が産出することが明らかにされている（秦 2007、齋藤 2002b）。

出羽山地北部は、まさに女川層が広がる地域にあたり、米代川流域が代表的な産地とされている（秦 2007）。そこには未成品が出土した池内遺跡やはりま館遺跡が位置している。ほかにも上岩川遺跡群が位置する三種川流域や男鹿半島なども珪質頁岩産地とされている。

青森県内では、齋藤岳（2002b）により石材調査が進められており、これらや地質図幅を参考にすると、津軽半島では、山田（2）遺跡の周辺には、女川層に相当とする小泊層（藤井 1966）があり、蟹田川やオノ神川を中心に珪質頁岩産地として知られている。さらに馬ノ神山層（長森ほか 2013）からも珪質頁岩が産出することも確認されている。津軽山地でも大童子層（盛谷 1968）があり、珪質頁岩産地が形成されている。さらに大面遺跡や沢部（2）遺跡周辺では、大童子層に相

当する大和沢層が近隣に広がり、付近に珪質頁岩産地が存在している（根本 2018）。

また、下北半島では、渡島半島南部まで続く珪質頁岩産地が確認されている。とくに大間崎では、小泊層相当の大間層（上村 1962）が広がり、珪質頁岩産地を形成し、付近に沢ノ黒遺跡が位置している。

このように、石槍生産の初期段階を示す未成品は、珪質頁岩産地周辺に限られている可能性が高い。接合資料はほぼ確認されていないが、唯一の山田（2）遺跡の資料を踏まえても、珪質頁岩産地周辺で石槍生産が活発に行われていたと考えられる。さらに、当該期の可能性がある上岩川遺跡群では、珪質頁岩の採掘だけでなく、原石から石槍の未成品にしていくなどの石器製作も進められ、採掘跡近隣の集落遺跡に石槍が未成品の状態で供給されていた可能性も論じられている（吉川 2010・2012）。

こうした点を踏まえると、未成品の分布は、珪質頁岩産地近隣の遺跡に限定され、広域的に未成品が広がっていることは想定できない。珪質頁岩産地直下で未成品まで仕上げられ、珪質頁岩産地近隣の集落遺跡で、未成品から完成品へと仕上げていた可能性がある。

5 石槍の形態とその地域性

ここまで見てきたとおり、未成品の分布から石槍生産は、珪質頁岩産地近隣の遺跡に集約される傾向にある。一方で、石槍は珪質頁岩産地から離れた太平洋側にかけても広がっている。そこで、ここからは、完成品の側から珪質頁岩産地周辺地域とそれ以外の地域での差異を読み解きたい。

そのために、形態的な特徴の違いを確認すべく、分析対象資料のうち完形品に限って、分析を進めた。

98 点の完形石槍（前期中葉：39 点、前期後葉：59 点）の最大長と最大幅を地域ごとに比較した

結果、むしろ珪質頁岩産地から離れた北上山地北部や上北平野、さらに青森平野で大型品が分布する傾向にある点を確認した(図10)(註2)。

縄文時代前期中葉では、おおむね最大長が60mm～120mmの範囲に多くの資料が分布する傾向にある。一方で150mmを越えるような大型品も複数存在している(図10)。

地域ごとに見ていくと、出羽山地北部、津軽半島、下北半島では、おおむね最大長が60mmから150mmの範囲に分布するのに対して、青森平野、上北平野、北上山地北部では、最大長が60mm～120mmも散見されるが、150mm以上の資料が確認できる。青森平野の三内丸山遺跡第6鉄塔地区第Ⅵa層からは186mm、北上山地北部の畑内遺跡E捨て場及びF捨て場からは、219mm、174mm、188.9mm、上北平野の東道ノ上(3)遺跡斜面地第ⅢB層では174.2mmの資料が出土している(図10)。

さらに縄文時代前期後葉でも同様の傾向を確認できる。出羽山地北部、津軽半島、下北半島では、おおむね最大長が60mmから150mmの範囲に分布するのに対して、青森平野や北上山地北部では、最大長が60mm～120mmも散見されるが、150mm以上も含めた資料が確認できる。青森平野の石江遺跡DSK-4025からは165.6mm、畑内遺跡C捨て場では204.9mmの大型品が出土している(図10)。

大きさを明確に比較するため、完形品に絞って分析しているため、資料数は少ないが、青森平野や太平洋側の上北平野、北上山地北部といった地域に大型品が残されている状況は注意を要する。なかでも上北平野や北上山地北部では、珪質頁岩産地からは約100～150km以上離れているのも関わらず大型品が出土している。さらに、上北平野や北上山地北部では、折損資料に広げてみても、150mm以上の大型品が残されている(図6-2、11-8)。

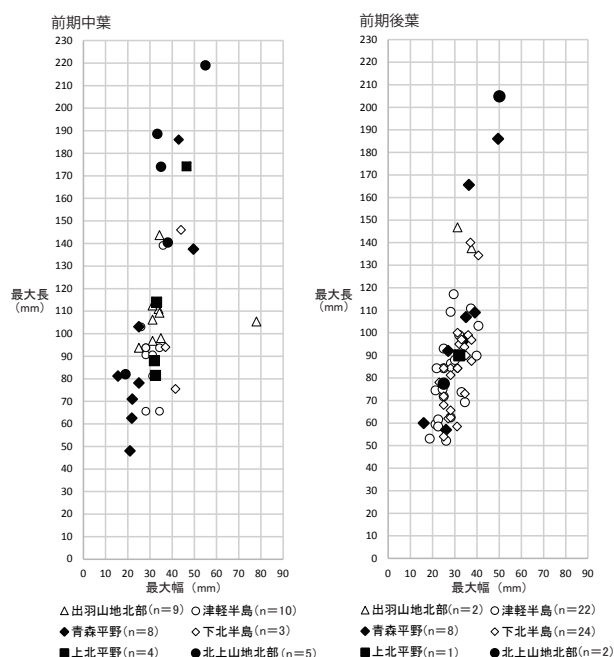
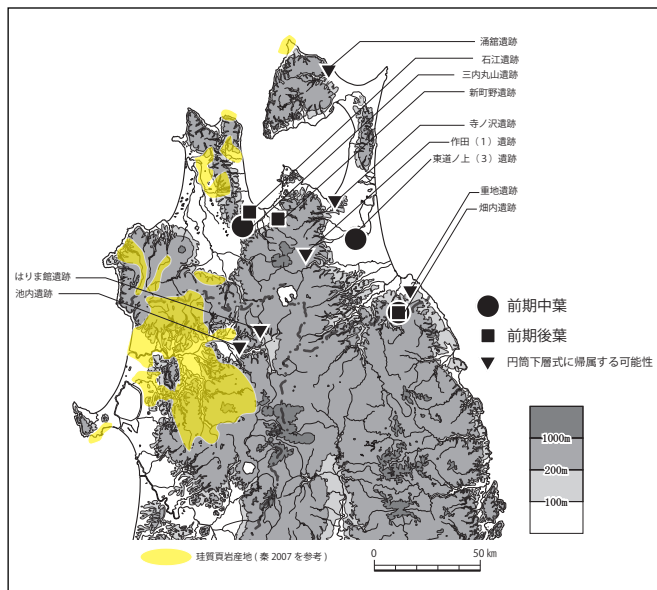


図10 円筒下層式期における石槍の法量

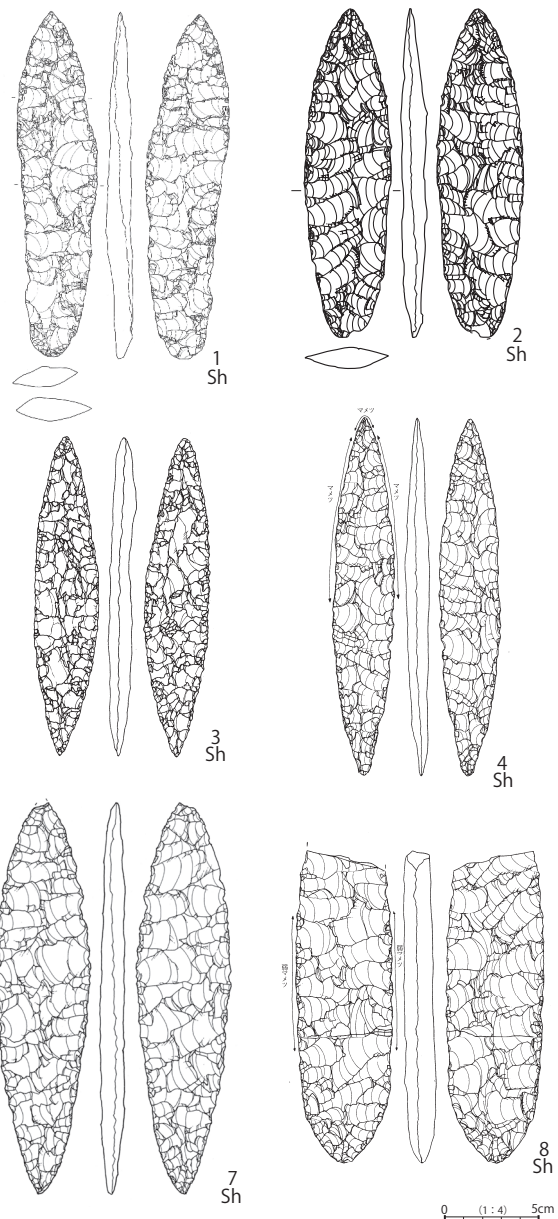
また、時期認定が困難な遺構内外の資料、表採資料であっても円筒下層式期に帰属する可能性があるものを含めてみても太平洋側での大型品の出土が目立つ傾向にある。日本海側のほりま館遺跡の遺構外資料(178.5mm)や池内遺跡SKS824出土資料(185.7mm)に大型品が存在するが、それでも太平洋側で大型品が多数見つかった。円筒下層式の土器が採集された寺ノ沢遺跡(工藤1975)の表採資料(221mm)、円筒下層a～b式期の捨て場が検出されている作田(1)遺跡(七戸町教育委員会1992)の遺構外資料(183mm)、円筒下層c～d式期の居住域付近から出土した重地遺跡(小笠原2002)の遺構外資料(193mm)、畑内遺跡I(鈴木・木村1994)の遺構外資料(197mm)で大形品が確認できるなど、太平洋側を中心に大型品が残されていた可能性が高い(図11)。

6 珪質頁岩産地の偏在化をめぐる石槍生産 (1) 石槍をめぐる石材産地と製作地との関係

円筒下層式期の石槍では、ほぼ珪質頁岩製に限



大型石槍の分布図



縄文時代前期中葉

1：三内丸山遺跡第6鉄塔地区Ⅵa層（岡田・中村ほか1998）、2：東道ノ上（3）遺跡（成田ほか2006）

3・5：畑内遺跡Ⅷ・E捨て場（茅野・小山2002）、4：畑内遺跡Ⅷ・F捨て場（小田川・小山ほか2002）

縄文時代前期後葉

6：石江遺跡 DSK-4025（山田・神2008）、7：畑内遺跡Ⅵ・C捨て場（木村・笹森・茅野2002）、8：畑内遺跡Ⅷ・F捨て場（小田川・小山ほか2002）

図11 石材産地から離れて分布する大型石槍

られる。両面調整の石匙のなかに黒曜石を使用しているものも確認できるが、石槍についてはほとんど確認できない。円筒上層式期になると、三内丸山遺跡を中心に黒曜石製の石槍が出土し、黒曜石利用の中心は中期以降と考えられる。

当該期の石槍生産は、その未成品の分布から珪質頁岩産地近隣の遺跡に限られることを確認し

た。

これまで想定されてきた珪質頁岩産地周辺の遺跡から未成品が各地の遺跡に供給されていたという図式（齋藤1998・2018）をそのまま想定することはできない。むしろ、未成品の供給は珪質頁岩産地の周辺に限られ、珪質頁岩産地周辺の遺跡で未成品から完成品に近い状態に仕上げたもの

が、各地に広がっていたのではないだろうか。そのため、各地で石槍が他器種製作のための石核としての役割を担っていたこと(齋藤 2018)も想定しがたい。

そこには、各地での細部調整をはじめとした石槍のメンテナンスの可能性を否定するものではない。三内丸山遺跡第6鉄塔地区の水洗い選別資料の検討では、10mm 前後のポイントフレイクが存在し、細部調整の可能性が指摘されている(齋藤 2003)。むしろ、こうした細部調整ではなく、原石から完成品に近い状態に仕上げていく工程が珪質頁岩産地周辺に限定されていた可能性を強調したい。

このように石槍は、豊富な石材を背景として、珪質頁岩産地近隣で製作されていた可能性が高い。未成品の認定をめぐることは、資料の着眼点によって評価が大いに左右される面はあるが、少なくとも表面や裏面に自然面が残される資料(図 1-3、図 8-8、図 9-2・5～6 など)が、珪質頁岩産地近隣の遺跡に限られる点を積極的に評価していく必要がある。

(2) 珪質頁岩産地の偏在化と石槍生産

珪質頁岩産地の偏在化は、当時の石槍生産にどのような影響を与えたのだろうか。それにもかかわらず、とりわけ大型品が遠隔地に広がっている。

石材産地から離れると中継地を経由するなどして、その間にリダクションが進行し、産地から遠くなれば、小形化していくことが想定されるが、円筒下層式期の石槍では、こうした状況にない。極端な例ではあるが、関東平野西南部に展開する後期旧石器時代後半期のナイフ形石器群(砂川期)では、遠隔地の信州産黒曜石など遠隔地の石材ほど、その消耗が進み小形化しているなど、遺跡間を移動していく過程でリダクションが進行している(山地ほか 2019)。さらに、東北地方北部の縄文時代初頭の神子柴系石器群では、珪質頁岩

産地近隣の大平山元 I 遺跡(三宅 1979)において、193mm の石斧が残される一方で、産地から離れた東北町長者久保遺跡(山内・佐藤 1967)では、149mm と小さく、細身の尖頭器も残される状況にある。移動の先々でリダクションが進行した結果なのかもしれない。これら後期旧石器時代後半期や縄文時代初頭といった活動拠点を順次移動させながら生活を営むなかでは、もともとの原石の大きさに制約される場合もあるが、遠隔地に産地がある石材ほど、それらの消耗が進み、小形化していく傾向にある。

一方で、円筒下層式期の石槍を眺めると、石材産地から離れた上北平野や北上山地北部であっても 150mm を越え、200mm 前後の長大な石槍が残されており、大きく状況が異なる。先述したとおり、石槍生産の場が珪質頁岩産地近隣に限られることから大型品も珪質頁岩産地近隣で製作され、約 100～150km 以上も運ばれていた可能性がある。遠隔地の遺跡では、大型品が出土することに加え、左右非対称品も少ないことから石材産地近隣で製作され、もたらされるまでにリダクションが進行しているわけではない。むしろ、珪質頁岩産地から直接もたらされている可能性すら見込まれる。

こうした点まで読み解くことはできないが、珪質頁岩産地から離れた地域であっても大型品が供給されている点には注意を要する。

こうした状況には、拠点的な集落の形成と合わせて集落間のネットワークが張り巡らされていた可能性が見込まれる。そのネットワークを「流通網」や「交易圏」と呼ぶかはともかくとして、円筒下層式期の社会には、遠隔地まで大型品が動いていく仕組みがあったとみられる。

(3) 石槍の供給をめぐる集落間の関係性

遠隔地にまで大型品が供給される背景にはどのような仕組みがあったのであろうか。

こうした点を読み解いていくためには、当時の集落動態と合わせて検討する必要があるが、ここでは予察的に検討したい。

集落構成と合わせてみると、拠点的な集落と大型品が結びつく傾向にある。当該期の集落には、居住域に加え、捨て場や墓域の形成が進む集落が存在し、集落施設が集約されるという点から拠点的な集落といえ、池内遺跡や畑内遺跡、三内丸山遺跡、石江遺跡、新町野遺跡、稲山遺跡が該当し、これらの遺跡では、最大長 150mm を越える石槍が出土している(図 11)。地域ごとにみていくと、珪質頁岩産地から離れた地域に大型品が広がっているが、遺跡ごとに見ていくと、むしろ拠点的な集落と結びつく傾向にある。調査面積の多寡により一律に評価できない側面が大いにあるが、上記遺跡では、大型品が出土している。大型品は出土していないが、山田(2)遺跡や沢ノ黒遺跡では、前期後葉から中期初頭の拠点的な集落であり、池内遺跡と同様に、石槍生産の痕跡が残されている。

これらを踏まえると、拠点的な集落が石槍生産とそのネットワークを担っていた可能性が高い。予察的ではあるが、各集落が数珠つなぎのようにして石槍が供給されていくのではなく、拠点的な集落のみが石槍生産地と結びついていた可能性すら浮かび上がってくる。大型品は、石材産地から離れた地域の拠点的な集落を中心に残され、石材産地近隣の複数の遺跡でも、石槍未成品とともに大型品が残される場合がある。

これを手がかりに読み解くと、拠点的な集落を通じて、石槍が供給されていたのではないだろうか。珪質頁岩産地近隣では、拠点的な集落が石材の獲得から石槍生産を担い、周辺の集落や珪質頁岩産地から離れた拠点的な集落に供給していく。石材産地から離れた地域では、その地域の拠点的な集落が大型石槍を含めた石槍の供給を受け、それを周辺の集落に供給していたのではないだろうか。そこには、大型品とそれ以外の製品がともに

一緒に動いていた可能性を前提に議論を進めているなど、課題は多くあるが、こうした可能性を究明していく必要がある。

そのためには、集落動態の詳細な検討と当時の石器群全体の生産と流通について検討する必要がある。

7 今後の課題

本研究では、円筒下層式期の石槍形態とその分布から、石槍生産の場合が珪質頁岩産地近隣の集落に集約され、石槍が完成品に近い状態で供給されていた可能性を指摘した。さらに珪質頁岩産地が偏在化しているにもかかわらず、むしろ大型品が珪質頁岩産地から離れた地域に広がっている点を確認し、その背景には、拠点的な集落間のネットワークが存在した可能性を指摘した。

縄文時代中期を迎えると、三内丸山遺跡や富ノ沢(2)遺跡といったごく限られた集落に石槍が集約される可能性すら見込まれる。さらに北海道産の黒曜石を用いた石槍もしばしば残されるなど、円筒下層式期とは、石材供給をめぐる状況が異なってくる可能性がある。

さらに、北海道を今回は対象としなかったが、北海道側では、木古内層をはじめ珪質頁岩産地と集落遺跡が密接して営まれる傾向あり、本州側とは石材環境が異なる可能性がある。こうした状況では、石槍はどのように広がっているのか、比較検討する必要がある。

いずれにしても、こうした観点から石槍に留まらず検討していくことで、円筒土器文化における石器製作や石材利用の特徴を具体的に描き出すことができると考えている。

註1 当該期の研究では長らく石槍の名称が使用されているため、筆者も使用したが、とくに石槍の一部は、狩猟具(刺突具)であったとは考えがたい。神子柴系石器群のなかには、刺突具ではなく、スクレイパーのような

加工具としての機能が想定されている(堤 2008)。縁辺部の使用も含めた可能性を想定しておく必要がある。

註2 青森平野は近隣の産地としてオノ神川まで約40kmと距離が近いなど、太平洋側とは珪質頁岩産地までの地理的特徴が異なる状況にある。また、荒川上流域の和田川層で10mm未満の原石採集が報告されている(齋藤 2002b)。また、七戸町や平内町にも和田川層が広がっているが詳細は不明である(齋藤 2002b)など、青森平野周辺の石材環境には課題がやや残る。

参考文献

- 安斎正人 2007「円筒下層土器期の社会—縄紋時代の退役狩猟者層—」『縄紋時代の社会考古学』, pp.27-58, 同成社
- 安斎正人 2010『日本人とは何か』 柏書房
- 市川金丸・畠山昇 1977『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 一町田工・小笠原幸範 1980『大面遺跡』青森県教育委員会
- 一町田工・菅田実 1982『山崎遺跡』青森県教育委員会
- 岩井美香子ほか 2003『沢部(2)遺跡』青森県教育委員会
- 上村不二雄 1962『5万分の1地質図幅説明書 大間・佐井』工業技術院地質調査所
- 大野憲司ほか 1988『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 2- 上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡 -』秋田県埋蔵文化財センター
- 岡田康博・中村美杉ほか 1998『三内丸山遺跡Ⅸ - 第6鉄塔地区調査報告書 -』青森県教育庁文化課
- 岡田康博・成田悟ほか 1998『三内丸山遺跡Ⅹ』青森県教育庁文化課
- 小笠原善範 2002『重地遺跡』八戸市教育委員会
- 小田川哲彦・小山浩平ほか 2011『山田(2)遺跡Ⅲ』青森県教育委員会
- 小野貴之 2003『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森市教育委員会
- 小野貴之 2004『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』青森市教育

委員会

- 北林八洲晴・下山信昭・川口潤 1995『板子塚・熊ヶ平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 北林八洲晴・木村鐵次郎 1996『畑内遺跡Ⅲ』青森県教育委員会
- 木村鐵次郎・笹森一朗ほか 1996『畑内遺跡Ⅴ』青森県教育委員会
- 木村鐵次郎・笹森一朗・茅野嘉雄 2000『畑内遺跡Ⅵ』青森県教育委員会
- 工藤竹久 1975「北日本の石槍・石鏃について」『北奥古代文化』9, pp.40-55
- 工藤竹久 1979「北日本における縄文時代狩猟用具変遷の意義」『考古学ジャーナル』170, pp.22-26
- 小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦(編) 2005『日本の地形 3 東北』東京大学出版会
- 小林克ほか 1990『はりま館遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会
- 齋藤岳 1998「石器」『三内丸山遺跡Ⅸ 第二分冊』pp.200-209, 青森県教育委員会
- 齋藤岳 2002a「石器」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』, pp.137-148, 青森県
- 齋藤岳 2002b「青森県における石器石材の研究について」『青森県考古学会 30周年記念論集』, pp.63-81, 青森県考古学会
- 齋藤岳 2003「三内丸山遺跡の第6鉄塔地区の石器組成と挟入扁平磨製石器の使用法について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』6, pp.16-33, 青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室
- 齋藤岳 2010「青森県内出土事例を中心とした異形石槍について」『青森県考古学』第18号, pp.77-86, 青森県考古学会
- 齋藤岳 2018「第3項 石器」『三内丸山遺跡 44(第2分冊)』pp.72-86, 青森県教育委員会
- 齋藤岳・杉野森淳子・岡本洋 2021「大平墓地公園遺跡出土石器について」『青森県立郷土館研究紀要』第44号, pp.25-34, 青森県立郷土館
- 櫻田隆 1999『池内遺跡 遺物・資料篇』秋田県教育委員

会

櫻田隆ほか 1997『池内遺跡 遺構篇』秋田県教育委員会

櫻田隆・小畑巖 1988『国道 103 号大館南バイパス建設
事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1』秋田県教育
委員会

柴田陽一郎ほか 1991『国道 103 号道路改良事業に係る
埋蔵文化財調査報告書 4』秋田県教育委員会

柴田陽一郎ほか 2010『狼穴Ⅱ遺跡』秋田県埋蔵文化財セ
ンター

鈴木克彦 1978『熊沢遺跡』青森県教育委員会

鈴木克彦・木村鉄次郎 1994『畑内遺跡Ⅰ』青森県教育委
員会

七戸町教育委員会 1992『作田遺跡』七戸町教育委員会
大工原豊 2019「東北地方前期の石製儀器類」『季刊考古学』
第 148 号, pp.19-23, 雄山閣

茅野嘉雄・小山浩平 2001『畑内遺跡Ⅶ』青森県教育委員
会

茅野嘉雄・小山浩平 2002『畑内遺跡Ⅷ』青森県教育委員
会

堤隆 2008「神子柴遺跡における石器機能推定」『神子柴』,
pp.268-288, 信毎書籍出版センター

長森英明・宝田晋治・吾妻崇 2013『青森西部地域の地質』
産業技術総合研究所地質調査総合センター

中山昭大・鈴木宏行ほか 2016『木古内町大平遺跡（2）
- 遺構編 -』北海道埋蔵文化財センター

中山昭大・鈴木宏行ほか 2017『木古内町大平遺跡（3）
- 盛土・包含層編 -』北海道埋蔵文化財センター

成田滋彦ほか 2006『東道ノ上（3）遺跡』青森県教育委
員会

成田滋彦ほか 2010『明戸遺跡・高屋遺跡』青森県教育委
員会

根岸洋・工藤大 2012『涌館遺跡』青森県教育委員会

根本直樹 2018「第 1 節 沢部（2）遺跡周辺の地形及び
地質と遺跡の基本層序」『沢部（2）遺跡』, pp.8-18,
青森県教育委員会

野村信生ほか 2007『沢ノ黒遺跡』青森県教育委員会

長谷部言人 1927「圓筒土器文化」『人類学雑誌』42 巻 1

号, pp.28-41

秦昭繁 2007「珪質頁岩の供給」『縄文時代の考古学 6
ものづくり』, pp.196-203, 同成社

秦昭繁 2010「押出遺跡の『両刃石匙』からみる石器消費
形態」『山形考古』40, pp.58-77

藤井敬三 1966『5 万分の 1 地質図幅説明書 金木』工業
技術院地質調査所

藤山龍造 2017「バイフェイス・リダクション仮説とそ
の評価―尖頭器石器群の発達を中心に―」『駿台史学』
第 161 号, pp.81-109, 駿台史学会

三宅徹也 1979『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』青森県
立郷土館

村越潔 1974『円筒土器文化』雄山閣

盛谷智之 1968『地質調査報告 5 万分の 1 地質図幅 深浦
地域の地質』工業技術院地質調査所

山地雄大・太田千裕・藤山龍造 2019「石材構成に見る『砂
川期』の移動形態」『シンポジウム 砂川遺跡―旧石器
時代研究の過去・現在・未来―予稿集』, pp.30-33, 明
治大学黒耀石研究センター

山田雄正・神康夫 2003『石江遺跡・三内沢部（3）遺跡Ⅲ』
青森県教育委員会

山内清男・佐藤達夫 1967「下北の無土器文化―青森県上
北郡東北町長者久保遺跡発掘調査報告―」『下北 自然・
文化・社会』, pp.98-109, 平凡社

吉川耕太郎 2010「珪質頁岩採掘址群 三種町上岩川遺跡
群の構成と採掘・石器製作・搬出」『秋田県埋蔵文化
財センター研究紀要』第 24 号, pp.38-58

吉川耕太郎 2012「秋田県域における縄文時代前期後半
から後期初頭の石材資源開発」『東北地方における中期
／後期変動期 4.3Ka イベントに関する考古現象
①』, pp.31-41, 東北芸術工科大学

利部修・菅原幹夫・今野沙貴子 2008『鹿渡Ⅱ遺跡・樋
向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大
沢Ⅱ遺跡』秋田県埋蔵文化財センター

渡辺誠 1969「縄文前期文化 東日本」『新版 考古学講座』
第 3 巻, pp.69-83, 雄山閣

Ⅲ 特別研究推進事業成果概要報告

共同研究

円筒土器文化における集落の実態をさぐる

—時間差・地域差・存続期間の比較研究—

三内丸山遺跡センター

三内丸山遺跡特別研究推進事業は、遺跡の全体像解明と縄文文化の解明を進めるため、平成10年度から実施している。

1 はじめに

三内丸山遺跡では、平成29年から、時期差や地域差を表す属性を土器型式だけではなく、遺構や遺物から抽出し、円筒土器文化圏内における集落の特徴等を詳細に理解することを目的に、「円筒土器文化における集落の実態をさぐる—時間差・地域差・存続期間の比較研究—」として、三内丸山遺跡を中心とした円筒土器文化圏内における集落の詳細な比較を行ってきた。

平成29年から令和元年においては北海道・青森県・秋田県・岩手県の集落遺跡から竪穴建物跡についての属性を抽出し地域毎の比較を行った。

令和2年度からは2か年の計画で、竪穴建物跡以外の集落構成要素である、土坑墓・埋設土器について地域毎の比較を行うこととした。

2 令和2年度の作業

(1) 対象遺跡(図1)

北海道・青森県・秋田県・岩手県で確認されている縄文時代前期中葉から中期末葉の土坑墓を検出した遺跡を対象として、土坑墓の属性(遺構規模、平面形状出土遺物)の抽出を行う。令和2年度は主に青森県の土坑墓について調査を行った。

(2) 墓の認定基準

墓の認定については発掘調査報告書で墓、また

は墓の可能性があるとされているものを対象とした。

(3) 変遷図の作成(図2)

抽出した土坑墓について平面形と時期で変遷図を作成した。

3 令和2年度の成果

(1) 土坑墓の特徴について

ア 土坑墓の分布

前期では青森市から西側の津軽地域では遺体を埋葬するためにつくられたと考えられる土坑墓がみられるが、青森市より東側では、明確な墓がみられない。

前期末以降になると、県内全域で長楕円形の墓がみられるようになる。

イ 土坑墓の平面形

前期には平面形が円形を基調とした土坑墓が多くみられ、中期に入ると、円形から楕円形、長楕円形の墓がえられる。

ウ 出土遺物

前期には土器、石鏃、石槍、石匙、磨製石斧等が副葬され、なかでも石鏃がまとまって入る例がみられる(図3)。

中期になると墓からの遺物出土はほとんどみられなくなる。

エ 集落での配置

前期には、墓は貯蔵穴に近い場所につくられる傾向がみられた(図4・5・6)。中期には楕円形または長楕円形の墓が列状に配置される傾向が

みられる。また、縄文時代中期前葉には、道路状遺構に隣接して配置される例がみられる（図7・8）。

4 今後の作業について

今後は青森県以外の地域の土坑墓について分析を行いながら、平面形について分析を行い、変遷図の整理を行う。また、出土遺物についての傾向も調査を行う。

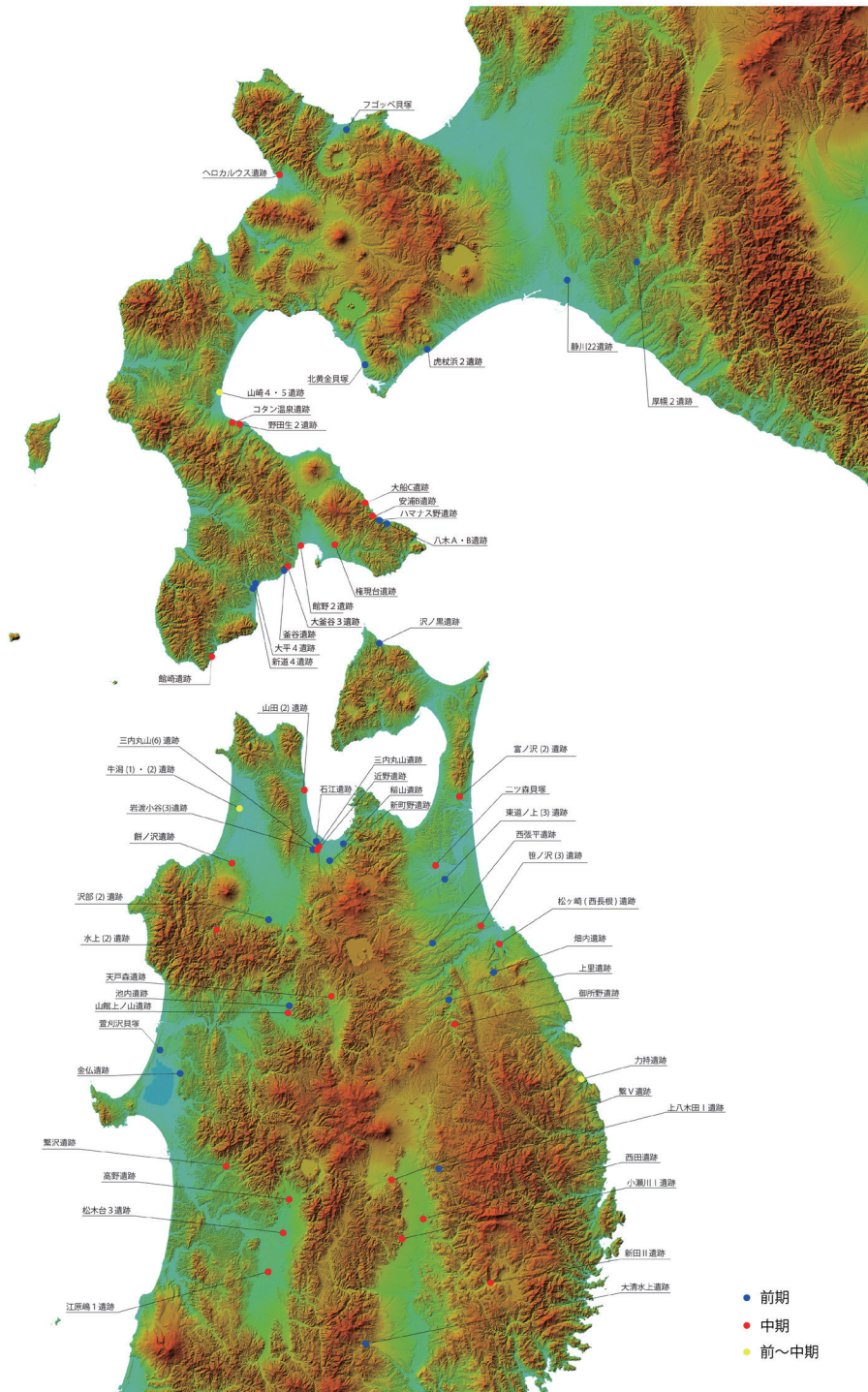
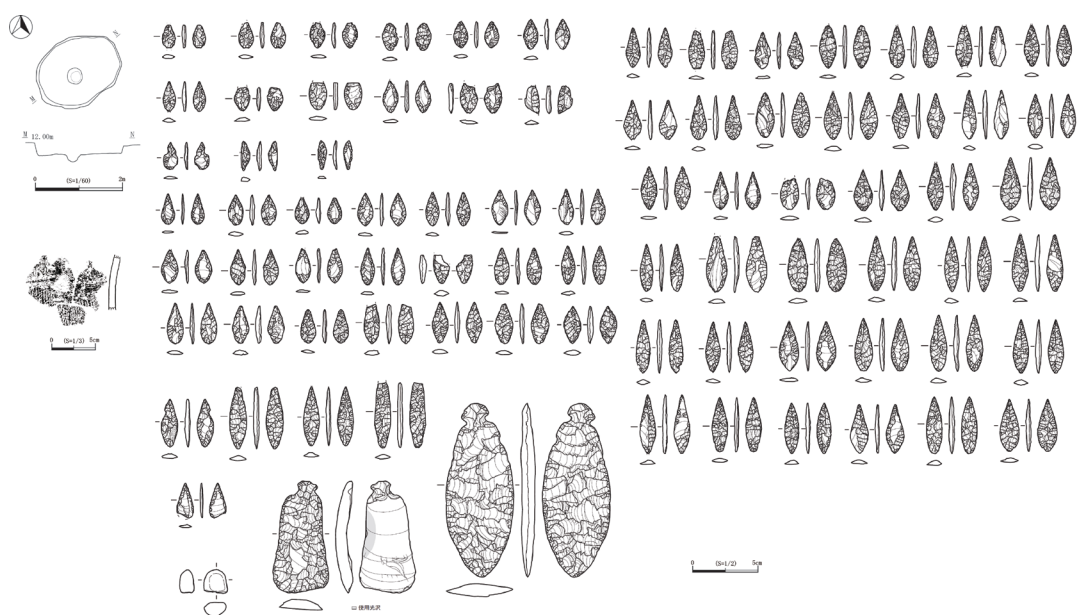


図1 対象遺跡位置図

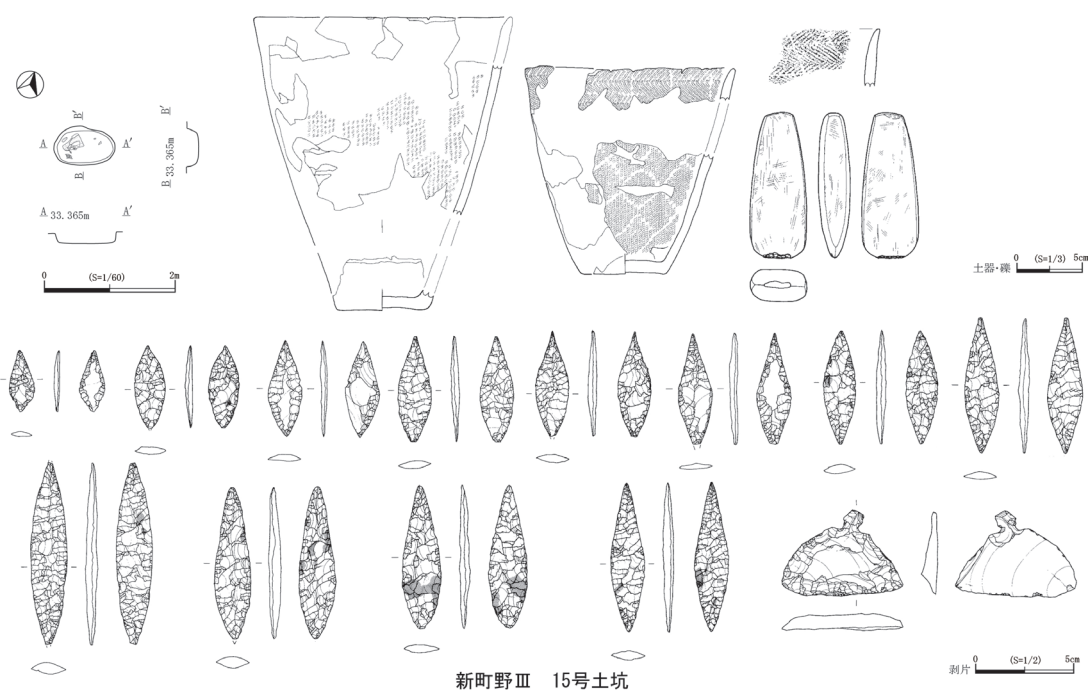
●ニツ森貝塚

0 (S=1/200) 4m

35



石江 DSK-6095



新町野Ⅲ 15号土坑

图3 土坑墓出土遺物（上：石江遺跡 第6095号土坑 下：新町野遺跡 第15号土坑）



図4 集落での配置(石江遺跡)

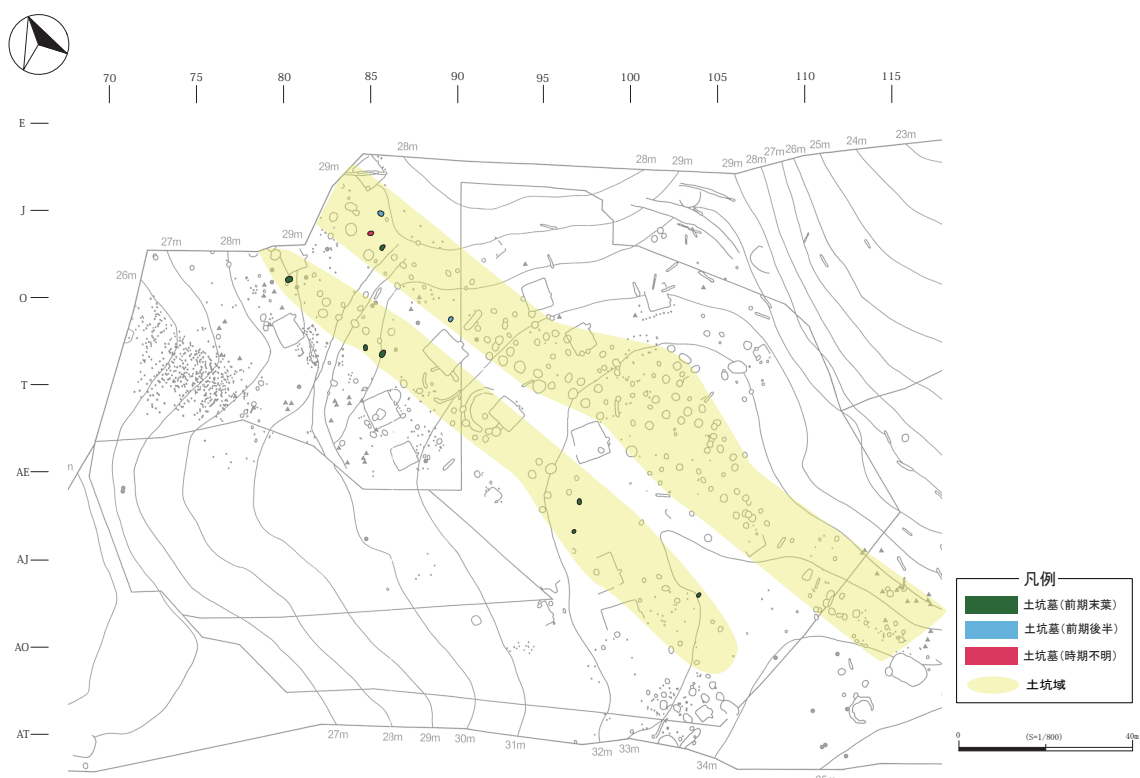


図5 新町野遺跡

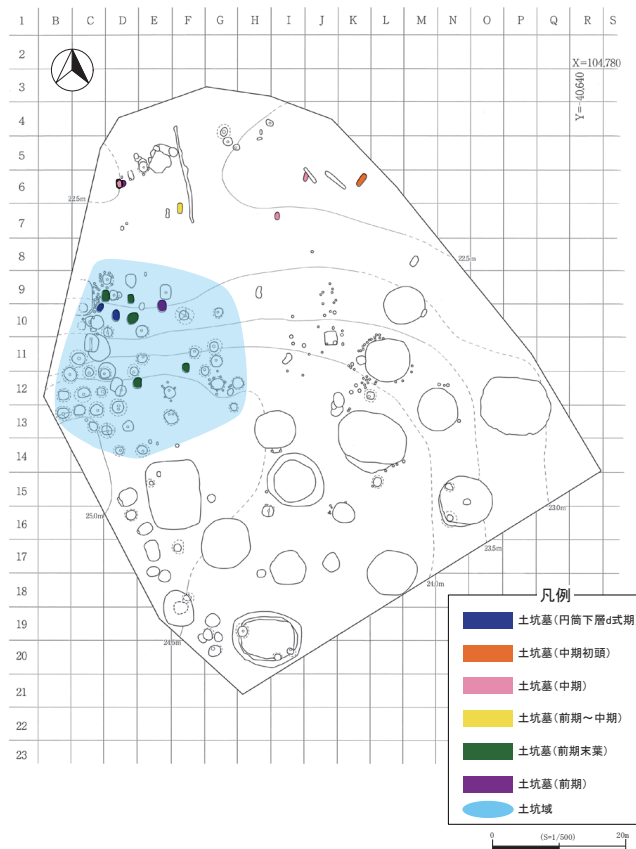


図6 牛潟(1)遺跡

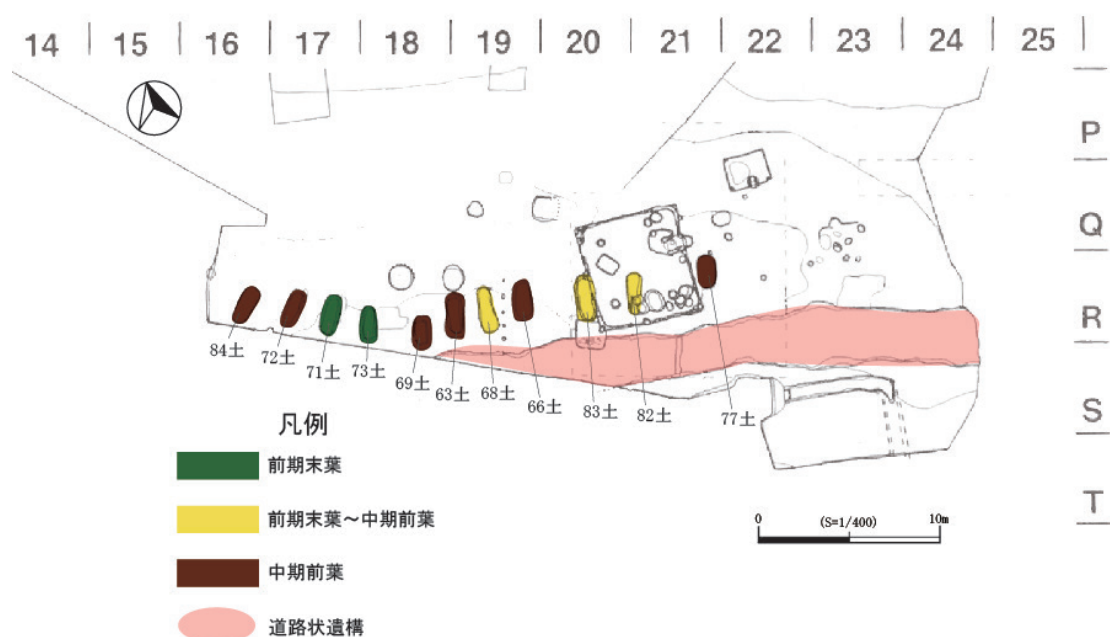


図7 牛瀉（2）遺跡

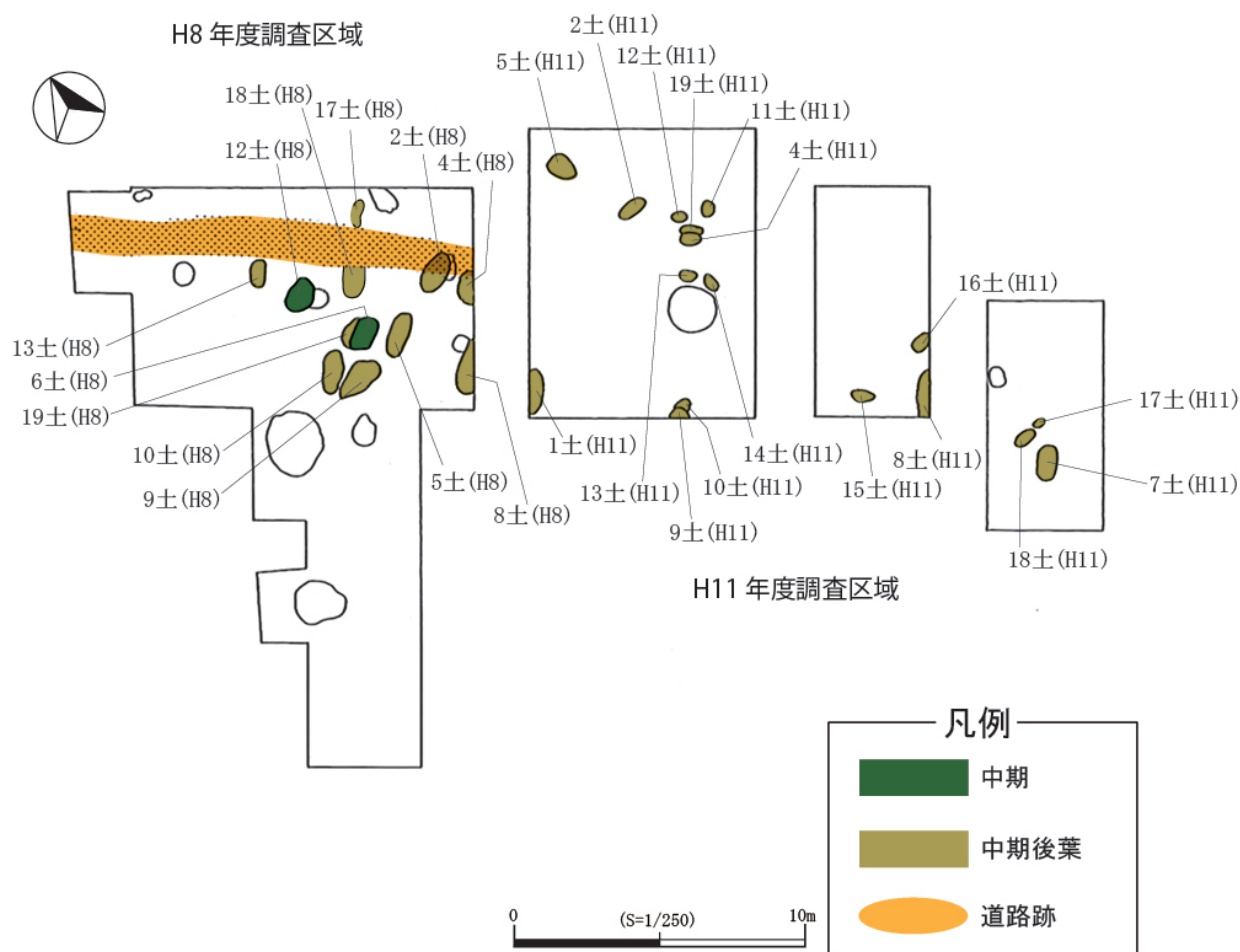


図8 ニツ森貝塚

IV 三内丸山遺跡出土品の保存修理事業について

1 はじめに

三内丸山遺跡の出土品のなかには、劣化が進んでいるものが少なくない。そういった出土品を保存修理することで、展示など様々なかたちで活用できるようになる。

令和2年度は、重要文化財が10点、第26号掘立柱建物跡の木柱1点の計11点の修理を実施した。

2 重要文化財の保存修理

三内丸山遺跡の出土品のうち、第6鉄塔地区と竪穴建物跡の出土品、1,958点は平成15年5月に重要文化財に指定され、平成15年度から、継続的に保存修理を行っている。令和2年度は、土器7点、骨角器3点の計10点を保存修理した。

土器は、解体修理をしたのち、再び組み上げ、隙間等に樹脂を充填し、充填部は彩色することで、修理した（写真1～21）。

骨角器は、表面の汚れやテープ痕などをクリーニングした後に、樹脂による強化処理をした（写真22～27）。

修理した出土品については、常設展「さんまるミュージアム」や特別展・企画展での展示等に活用していく予定である。

なお、本事業は文化庁国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を活用して実施した。

3 第26号掘立柱建物跡木柱の保存修理

三内丸山遺跡で復元されている第26号掘立柱建物（いわゆる6本柱）の木柱（クリ材）は、発掘調査で4本出土している。このうち1本は保存修理が完了し、常設展「さんまるミュージアム」の「縄文人のこころ」コーナーで常時展示している。ほかの3本についても活用できるよう保存修

理を行うこととし、平成30年度から3か年計画で、毎年1本ずつ保存修理を行った。令和2年度はその3年目にあたる。

保存修理では、クリーニングにより埃などを除去したのち樹脂を含浸させ本体を強化し、亀裂面や破断面、空隙部に樹脂を充填し、彩色を行った。加えて、保存展示用の台座を作成した（写真28）。

保存展示用の台座には、木柱の加工面が上面となるように据えている。これは、縄文人が木柱を伐採・加工した痕跡を展示するためである。

保存処理が完了した現在は、三内丸山遺跡センターの地下一階、「縄文ビッグウォール」の向いにある一般収蔵庫で保存・展示し、ガラス越しに見学することが可能である（写真29）。その際は、隣の「縄文ストレージウォール」の解説映像及び、解説パネル（写真30）から、この木柱の情報を得ることができる。

令和2年度をもって、第26号掘立柱建物跡から出土した木柱の修理は、すべて終了したことになる。今後は、これらの木柱を積極的に活用していくことを検討していく。

なお、本事業は文化庁の埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業を活用して実施した。



写真1 処理前



写真2 解体

写真1～3

整理番号 228(鉢・深鉢形土器-13)

出土地点 第164号竪穴建物跡



写真3 処理後



写真4 処理前

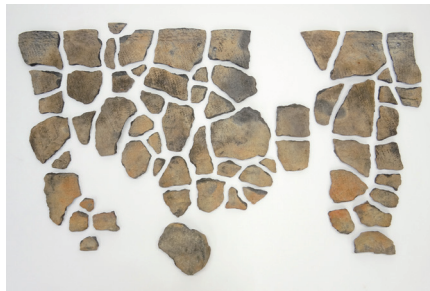


写真5 解体

写真4～6

整理番号 2079(深鉢形土器-41)

出土地点 第6鉄塔地区出土



写真6 処理後



写真7 処理前



写真8 解体

写真7～9

整理番号 345(鉢・深鉢形土器-84)

出土地点 第282号竪穴建物跡



写真9 処理後



写真 10 处理前

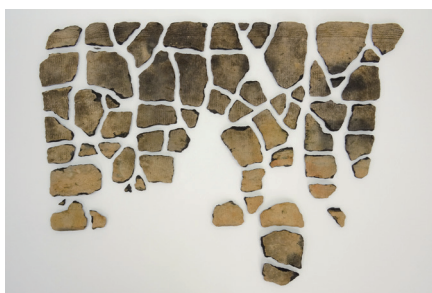


写真 11 解体



写真 12 处理后

写真 10～12

整理番号 422(鉢・深鉢形土器-118)

出土地点 第 290 号竖穴建物跡



写真 13 处理前



写真 14 解体



写真 15 处理后

写真 13～15

整理番号 162(鉢・深鉢形土器-179)

出土地点 第 132 号竖穴建物跡



写真 16 处理前



写真 17 解体



写真 18 处理后

写真 16～18

整理番号 169(鉢・深鉢形土器-181)

出土地点 第 145 号竖穴建物跡



写真 19 処理前



写真 20 解体



写真 21 処理後

写真 19 ～ 21

整理番号 456(浅鉢形土器-3)

出土地点 第 314 号竪穴建物跡



写真 22 処理前



写真 23 処理後

整理番号 190 (刺突具-41)



写真 24 処理前



写真 25 処理後

整理番号 272 (刺突具-58)

写真 22 ～ 25 は第 6 鉄塔地区出土



写真 26 処理前



写真 27 処理後

整理番号 496 (刺突具-80)

写真 26 ~ 27 は第 6 鉄塔地区出土



写真 28 木柱保存処理



写真 29 木柱展示状況

大型掘立柱建物跡 (6 本柱)

柱穴の検出状況

ここに展示している 3 本の木柱は、大型掘立柱建物跡からみつかった木柱です。6 基の柱穴のうち、4 基から木柱が発掘されました。内 1 本は、さんまるミュージアムで展示しています。柱は直径 70 ~ 90cm ほどで、クリ材を用いています。現在展示している面が、当時柱穴の底面に接していた面で、よくみると石斧で加工した痕があります。

木柱

柱痕及び木柱の出土状況

加工した痕跡

一般収蔵庫展示

木柱 1 木柱 2

さんまるミュージアム展示

木柱 3

立体表示

出土状況、保存処理等についての詳細は、ストレージウォール (下図) の映像をご覧ください。

ストレージウォール

映像

現在地

階段

エレベーター

縄文ビッグウォール

写真 30 解説パネル

V 三内丸山遺跡出土品の再整理事業に係る出土品紹介

高橋 哲（三内丸山遺跡センター）

1 はじめに

旧野球場建設予定地記録保存調査のうち、第6鉄塔地区と竪穴建物跡からの出土品 1958 点が、平成 15 年度に重要文化財に指定された。しかし、ヒスイ製大珠や土偶等、三内丸山遺跡を代表する出土品の多くは、未指定となっている。今回、土坑・盛土・捨て場等から出土した重要文化財追加指定予定の未報告資料を報告する。

個々の詳細は観察表を参照してもらい、ここでは特記事項を記す。

2 出土品の内容

（1）石器・石製品（図 1～図 4-2）

図 1-1～4 は、北盛土から出土した鋸歯縁の石鏃であり、すべて縄文時代中期のものである。鋸歯縁は、円筒土器文化の石鏃にはみられない特徴であり、数も少ないので、搬入品もしくは、他文化の影響で製作されたと考えられる。

図 1-6 の石槍の表面には、黒色付着物がみられる。

図 2-5 の石棒は、火を受けたため、所々剥落している。

石製品としては、玦状耳飾り、ヒスイ製品、装飾品、石製容器等がある。図 2-8 は、硬玉製大珠の破損品をハンマーに転用している。図 3-10 も硬玉製であり、破損面を研磨、穿孔し、再加工している。

（2）骨角器（図 4-3～6）

4 点掲載した。図 4-6 はクジラ骨製である盛土から出土し、被熱のため、白色化している。

（3）土製品（図 4-7～図 6-4）

イモガイ形土製品、クルミ形土製品、キノコ形土製品の他に、装飾品として垂飾り、耳飾り（耳栓形）、斧形土製品がある。

多くは沈線や刺突文が施されているので、中期後半に帰属する資料と考えられる。

三角形土製品（図 5-11～18）は、刺突や沈線で文様が施されている。また、隆帯を張り付けているものもある。同じく中期後半期のものと考えられる。

小形の棒状土製品のうち、図 6-1 は、小口面をくぼませており、石棒を模倣していると考えられる。

図 6-4 は、三脚を持つ不明土製品である。近野遺跡では鬲形土製品が出土しており、形態的に類似している。

（4）小形土器（図 6-5～9）

図 6-5 は、四脚を持つ片口形の小型土器で珍しい器形である。図 6-8 は、把手が付された片口形である。第 39 号竪穴建物跡から、形状が類似した、片口状の皿形土器が出土している。

（5）土偶（図 6-10～図 10）

十字形の板状土偶であり、文様も細沈線、押圧縄文、刺突文、沈線、縄文施文がある。

南盛土から出土した図 10-1 は、また部に沈線で描かれた逆三角形の中に 1 本の縦線があり、女性器を表現している。

図 6-10 や、図 8-8 は、異系統の大木系土偶がある。裾が広がるバイオリン形態で胸に大きな円形の凹みがある。

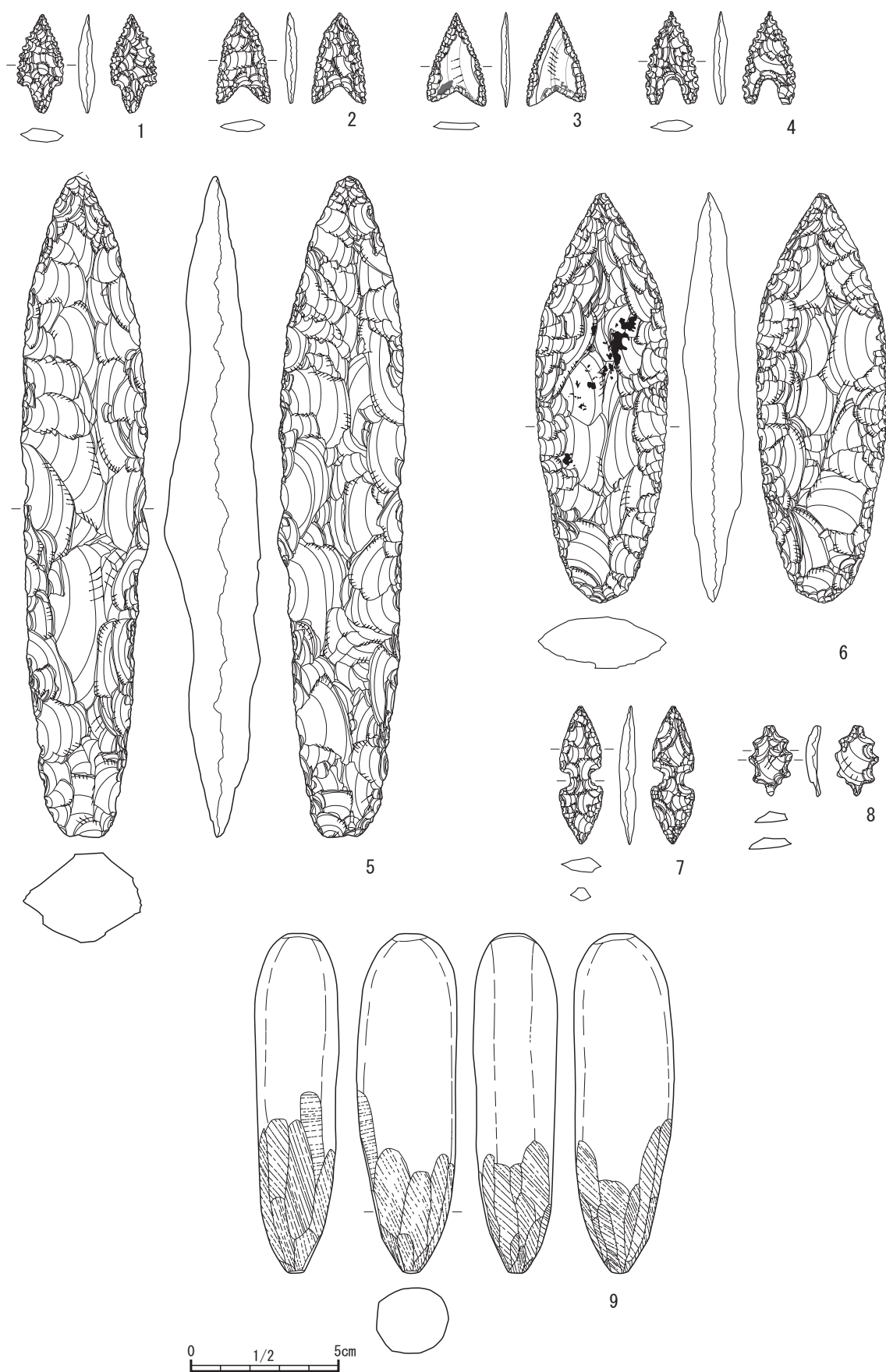


图1 石器・石製品実測図

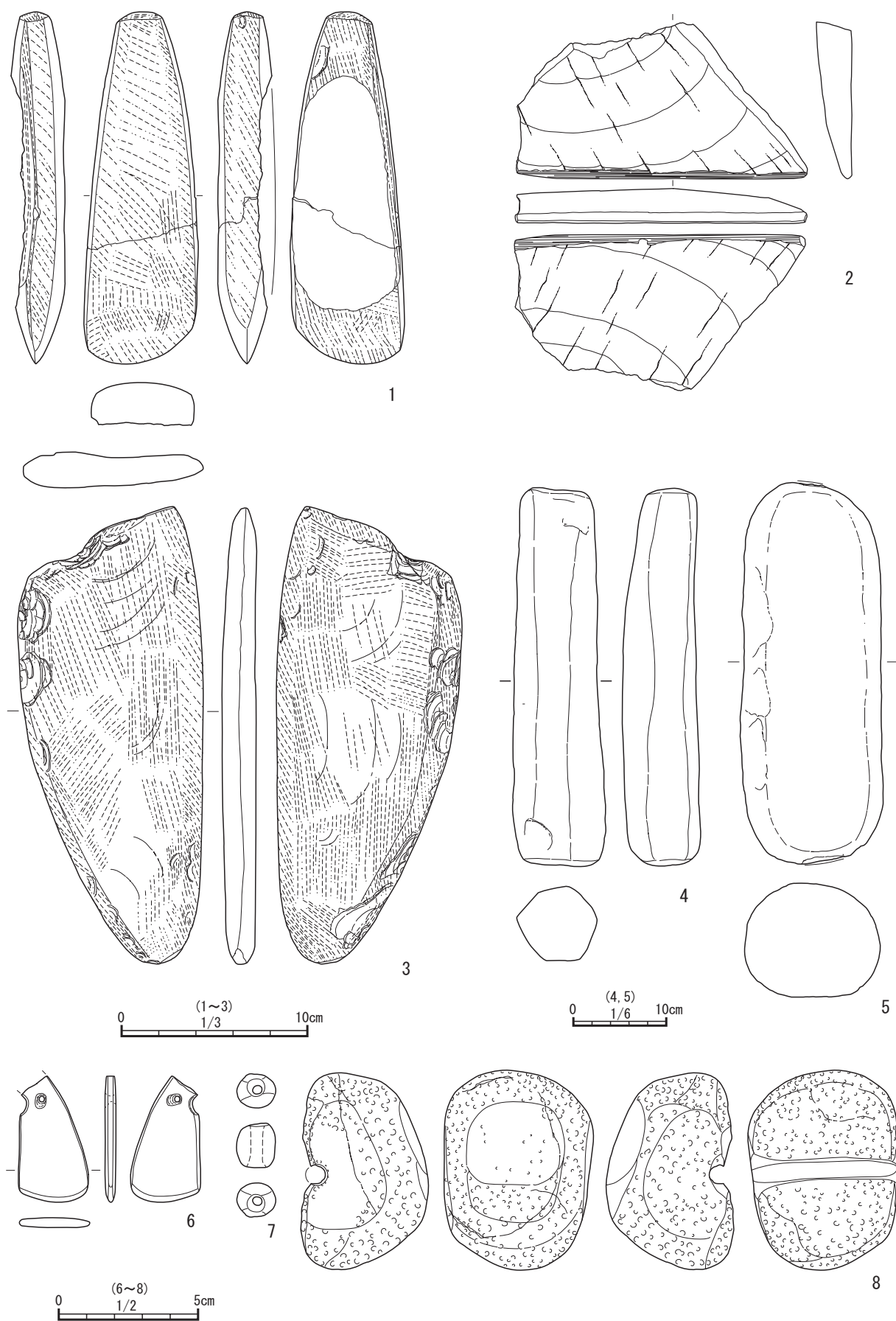


図2 石器・石製品実測図

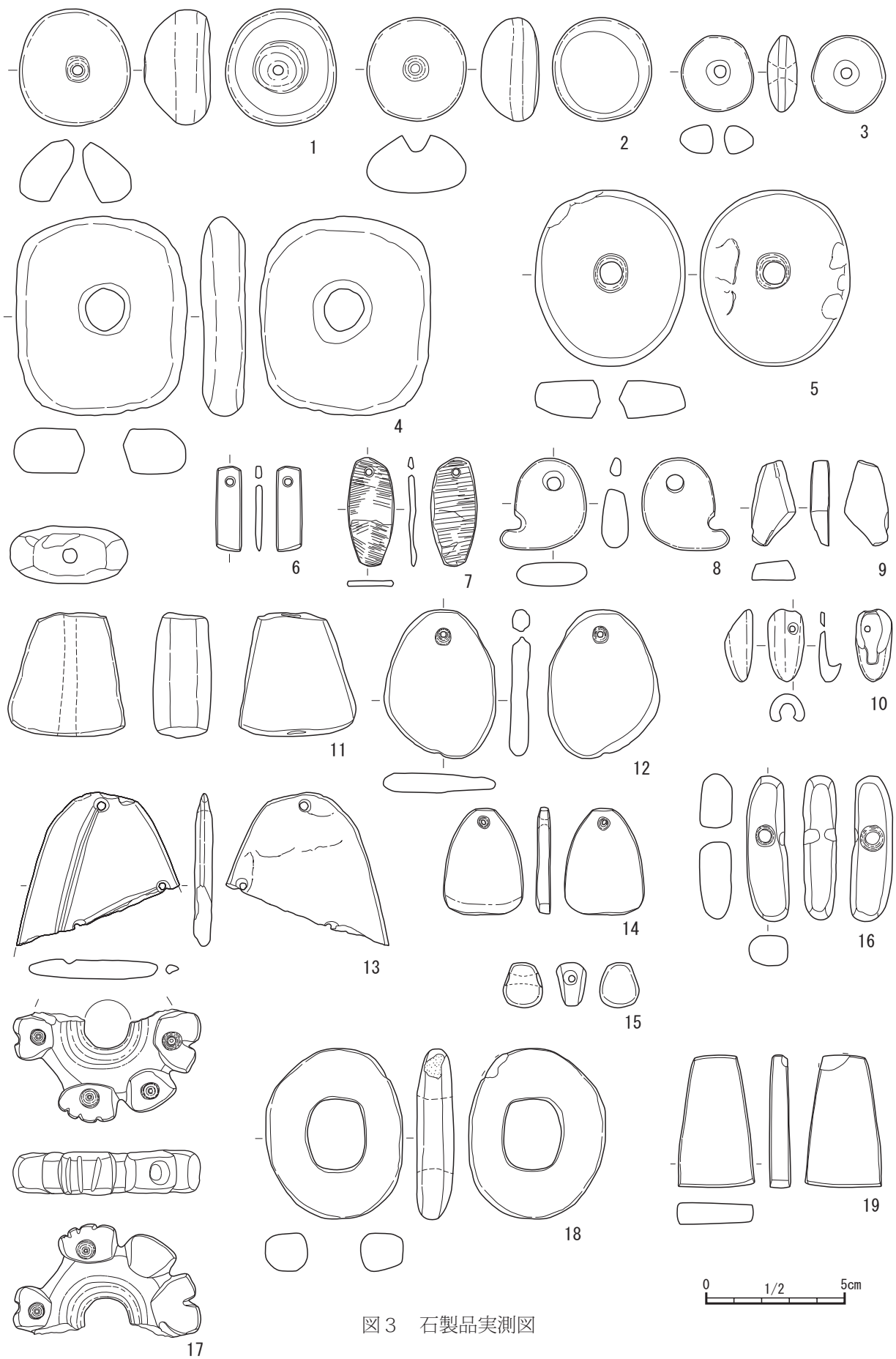


図3 石製品実測図



図4 石製品・土製品実測図

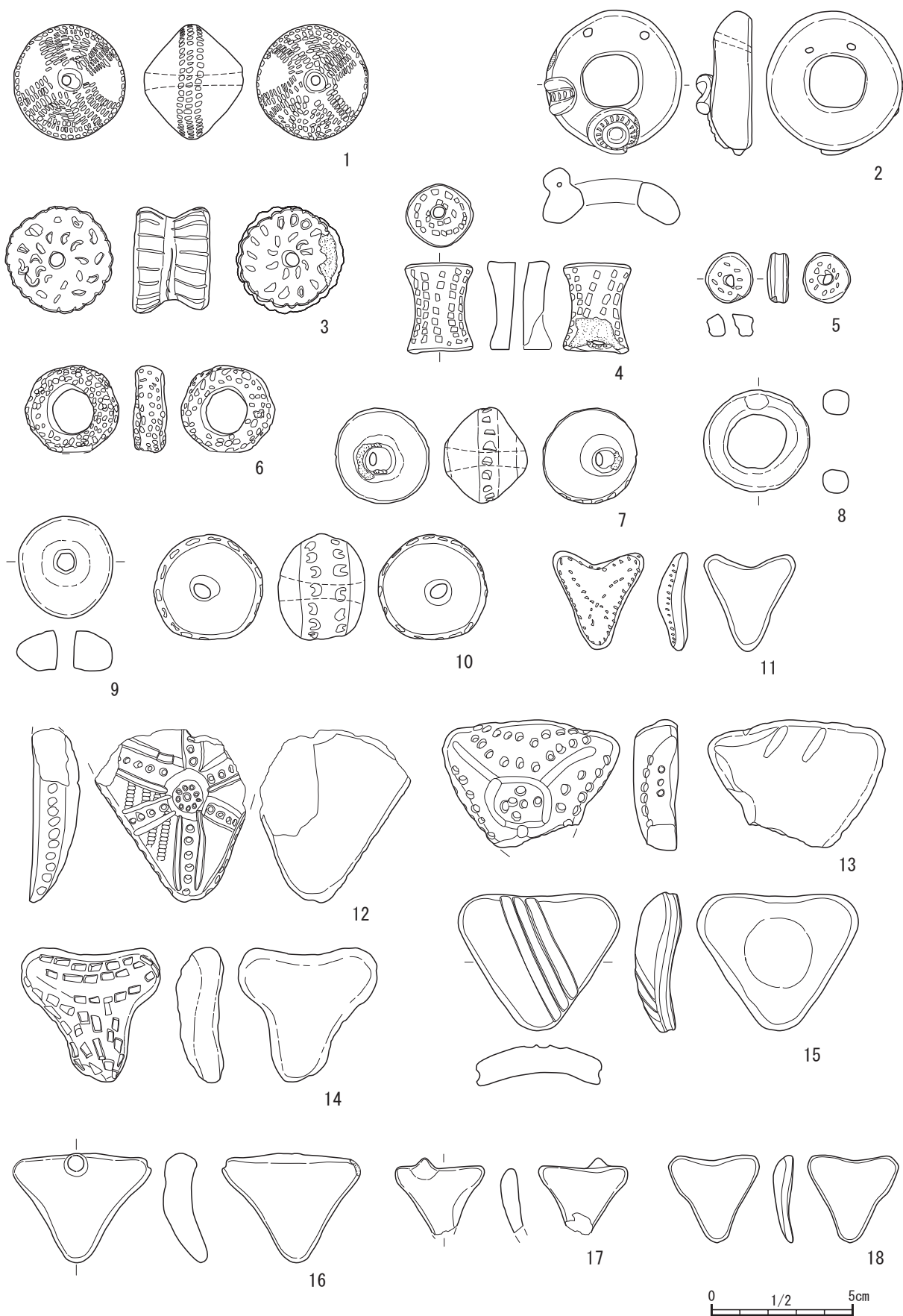


图5 土製品実測図



図6 土製品・小形土器・土偶実測図

0 1/2 5cm



图7 土偶实测图

0 1/2 5cm



图8 土偶实测图

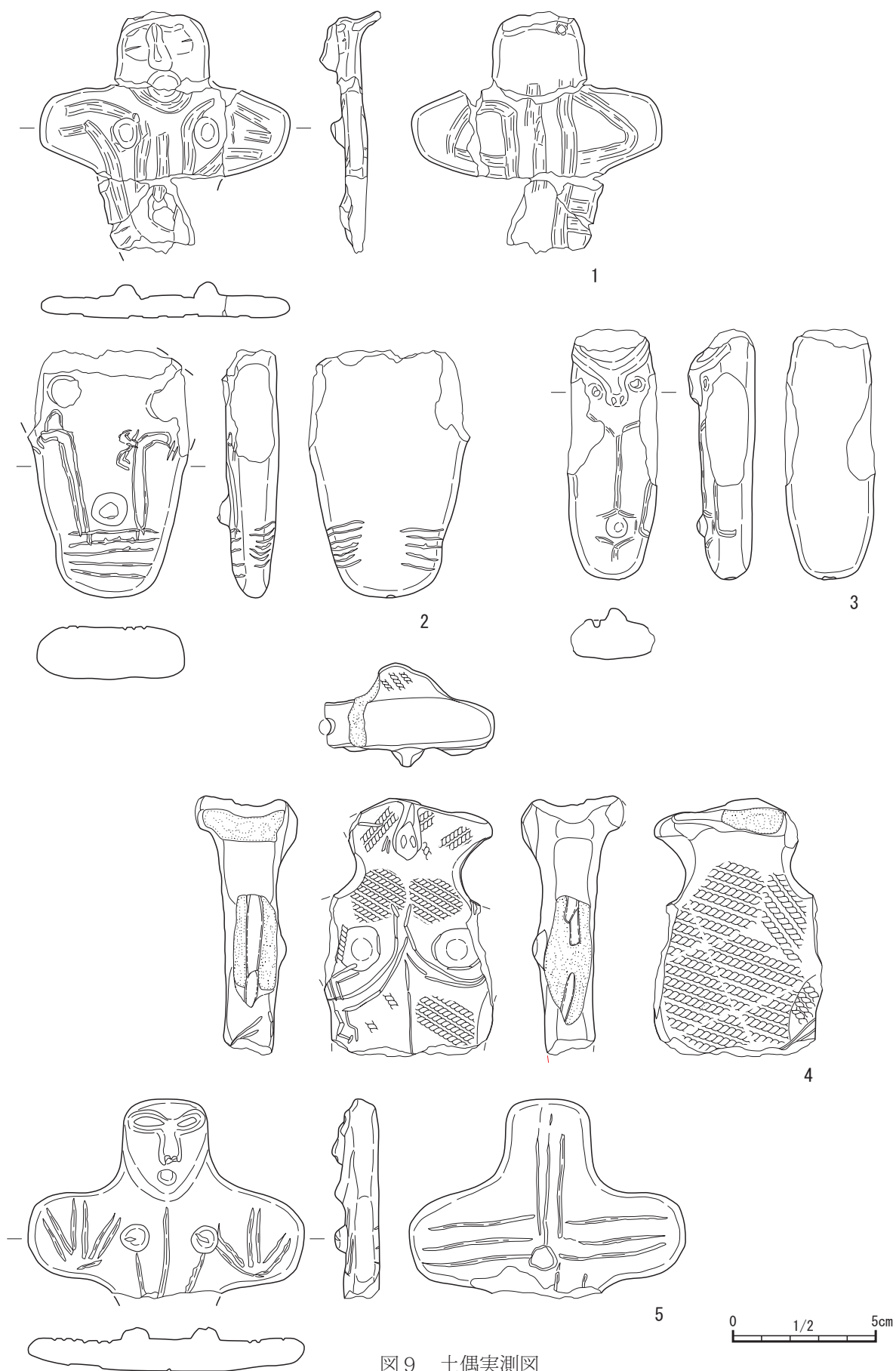


图9 土偶实测图



图 10 土偶实测图

図	番号	整理 番号	器種	遺構	出土地点	高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重 (g)	備考
1	1	25996	石鏃	北盛土	VIC-101 Ⅲa-9層	3.4	1.6	0.6	2.2	完形,珪質頁岩,有茎,鋸歯
1	2	24543	石鏃	北盛土	VIC-98 Ⅲa-8	3.1	1.8	0.4	1.9	完形,玉髓質珪質頁岩,凹基,五角形
1	3	22885	石鏃	北盛土	VIA-101 Ⅲa層	3.2	2.0	0.4	1.5	完形,珪質頁岩,凹基,鋸歯,アスファルト付着
1	4	22846	石鏃	北盛土	VIA-102 Ⅲa層	3.2	1.8	0.4	2.0	完形,珪質頁岩,凹基,鋸歯
1	5	29645	石槍	北盛土	VR-101 Ⅲa層	22.5	4.4	3.1	238.0	完形,珪質頁岩,大形
1	6	29646	石槍	北盛土	VID-100 Ⅲa-9層	14.0	4.5	1.8	108.0	完形,珪質頁岩,左右僅かに非対称
1	7	12573	異形石器	北の谷	V0-85 Ⅱ層	4.7	1.4	0.6	3.4	完形,珪質頁岩,木葉形,挟り1対
1	8	2185	異形石器	北盛土	V0-103 Ⅲ層	2.4	1.4	0.5	1.2	完形,鉄石英,赤色,棒状,突起6
1	9	4631	異形石器	北盛土	VIF-97 Ⅳ層	11.6	3.3	2.9	154.1	完形,凝灰岩,棒状で長軸一端を尖頭状に加工
2	1	29831	磨製石斧	南盛土	VII-120 Ⅱ層	18.8	6.1	(2.9)	459.1	緑色岩(青トラ),2片接合,胴部中央剥落,擦切痕
2	2	北盛土- レキ-2902	擦切具	北盛土	VS-99 Ⅲb層	16.0	8.3	1.9	272.1	完形,流紋岩,下端が摩滅
2	3	80928	挟入扁平 磨製石器	北盛土	VS-97 Ⅲb層	24.7	9.8	1.9	644.9	完形,石英安山岩
2	4	81145	石棒	北盛土	VIB-101 Ⅲa層	40.7	9.0	9.2	4765.5	完形,安山岩,棒状,断面五角形,各稜摩滅
2	5	北盛土- レキ-0471	石棒	北盛土	VR-103 Ⅲa層	41.0	14.5	12.0	12300.0	完形,流紋岩,棒状,断面円形,被熱痕あり
2	6	7047	玦状耳飾	北盛土	VIH-94 Ⅲ層	(4.1)	(2.5)	0.5	(7.4)	白雲母片岩(蛇紋岩),半欠,扁平三角形,破損後再加工で穿孔
2	7	2691	装飾品	北盛土	VIE-100 Ⅱ層	1.5	1.4	1.1	3.0	完形,丸玉,緑色凝灰岩,長軸に沿って穿孔
2	8	2921	装飾品	北盛土	VQ-100 —	5.9	6.9	5.1	306.4	完形,硬玉,緒締形,大珠の半欠を敲石に転用,中央に穿孔1
3	1	1331	装飾品	北盛土	VID-90	4.2	4.1	2.4	43.2	完形,凝灰岩,半球形,中央に片面穿孔1
3	2	2736	装飾品	北盛土	—	3.8	3.6	2.2	38.9	完形,緑色岩(アオトラカ),半球形,片面中央に盲孔1
3	3	2385	装飾品	南盛土	VIF-114 Ⅰ層	2.7	2.8	1.1	6.9	完形,凝灰岩(赤褐色),扁平環状,中央に穿孔1
3	4	2457	装飾品	南盛土	VIJ-124 Ⅱ層	7.2	6.2	1.4	67.0	完形,軽石(赤褐色),扁平隅丸方形,中央に穿孔1
3	5	3931	装飾品	北盛土	VID-97 Ⅰ層	6.3	5.4	1.4	54.0	完形,凝灰岩,扁平楕円形,中央に両面穿孔1
3	6	2582	装飾品	北盛土	VR-104 Ⅲa層	3.1	0.9	0.2	1.4	完形,垂飾,緑色岩,短冊形,長軸上端に穿孔1
3	7	2392	装飾品	北盛土	VIE-94 Ⅱb層	3.9	1.7	0.3	3.0	完形,垂飾,粘板岩,短冊形,長軸上端に穿孔1
3	8	2519	装飾品	北盛土	VR-99 Ⅱ層	3.2	3.3	1.0	5.4	完形,垂飾,緑色凝灰岩,不整楕円形,頭部が大きい勾玉状,両面穿孔1
3	9	2944	装飾品	北の谷	VQ-85 Ⅱ層	2.9	1.9	0.8	6.2	完形,硬玉,垂飾状,断面方形,未製品(擦切素材)
3	10	2943	装飾品	北の谷	VP-94 Ⅱ層	2.6	1.3	1.0	3.7	完形,硬玉,円柱状,長軸一端に穿孔,破損品を再加工
3	11	2843	装飾品	北盛土	VIE-99	4.4	4.2	2.1	12.0	完形,軽石,扁平台形状,長軸に片面穿孔1,無文
3	12	2690	装飾品	北盛土	V0-100 Ⅱ層	5.2	4.0	0.6	23.0	完形,垂飾,粘板岩,扁平楕円形,長軸上端に穿孔1
3	13	2709	装飾品	北盛土	VIJ-97 Ⅲ層	(6.3)	(4.4)	(0.7)	(26.5)	黒色片岩,垂飾,半欠,扁平台形,穿孔3,擦切痕
3	14	2581	装飾品	北盛土	VR-104 Ⅲa層	3.9	2.9	0.6	7.6	完形,垂飾,凝灰岩,隅丸三角形,長軸上端に穿孔1
3	15	2369	装飾品	北の谷	VP-94 Ⅱ層	1.6	1.5	1.0	3.1	完形,緑色凝灰岩,玉,楕円形,短軸に穿孔
3	16	2585	装飾品	北盛土	VR-98 Ⅱ層	5.3	1.6	1.3	17.6	完形,垂飾,緑色岩(アオトラ)か,円柱状,長軸中央に穿孔1,擦切後叩き折りの痕跡
3	17	3686	装飾品	北の谷	VP-101 Ⅱb層	6.0	(4.2)	1.5	(39.0)	凝灰岩,半欠,扁平環状,突起4つ,突起頂部に盲孔あるいは刻み,突起頂部にも盲孔
3	18	2492	装飾品	北の谷	VP-86 Ⅱ層	5.1	6.3	1.3	31.2	完形,スコリア,扁平,環状
3	19	2733	装飾品	北の谷	VQ-92 Ⅱ層	4.8	2.7	0.9	14.3	完形,凝灰岩,扁平な短冊形,無文

図	番号	整理番号	器種	遺構	出土地点	高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重 (g)	備考
4	1	2802	不明石製品	北の谷	VP-94 Ⅱ層	7.3	6.4	1.6	59.7	完形, 頁岩, 不整三角形, 全面が摩耗
4	2	4490	容器状石製品	北盛土	VII-84 Ⅲb層	3.1	6.4	5.4	87.2	完形, 凝灰岩, 楕円形, 碗形に割り抜く
4	3	651	装身具残欠	南盛土	VI0-127 Ⅲ層	(1.0)	(0.8)	0.3	(0.1)	垂飾か, 被熱による白色化, 残欠, 片側穿孔1
4	4	652	装身具残欠	南盛土	VIM-125 Ⅲ層	(3.2)	0.9	0.3	(1.1)	垂飾か, 被熱による白色化, 残欠, 片側穿孔1
4	5	654	刺突具	南盛土	VI0-121 Ⅲ層	(2.6)	1.1	0.5	(1.5)	刃, 被熱による白色化, 残欠, 片端穿孔(半欠), 扁平, 2片接合
4	6	666	骨刀	南盛土	VII-118 Ⅲ層	(3.2)	(3.0)	0.9	(6.2)	鯨骨, 被熱による白色化, 残欠, 片面平滑, 片面に列点多数
4	7	3225	イモガイ形土製品	北盛土	VIB-89 Ⅲ層	4.9	2.9	2.7	-	円錐形, 一部小欠, 側縁に凹みあり, 無文
4	8	1532	キノコ形土製品	北の谷	V0-91 Ⅱ層	(2.2)	5.6	(5.2)	-	キノコ形, 軸・傘一部欠損, 傘上面に縄文施文か, 全体摩滅
4	9	3248	クルミ押圧土製品	南盛土	VIG-116 Ⅲ層	2.2	2.1	0.7	-	円形, 上端小欠, 正面にU字状に隆帯でクルミの殻を表現, 裏面膨らむ
4	10	7749	土製装飾品	北の谷	VS-96 Ⅱ層	2.4	2.3	0.8	-	完形, 円盤状, 表裏凹む, 縁に盲孔1, 無文
4	11	1491	土版状土製品	2土	覆土	4.5	3.2	1.4	-	卵形, 一部欠損, 正面膨らみ, 裏面凹む, 正面に細沈線でY字文様, 中期後葉
4	12	3999	土製装飾品	南盛土	VI0-130 Ⅲ層	3.9	3.2	2.1	-	完形, 扁平楕円形, 長軸に沿って穿孔1, 沈線
4	13	1317	土製装飾品	北盛土	VIE-87 Ⅰ層	2.9	4.7	1.9	-	扁平長方形, ほぼ完形, 無文, 長軸中央に穿孔1
4	14	1691	土製装飾品	北の谷	VP-94 Ⅱ層	3.7	1.4	1.4	-	棒状, 胴部膨らむ, ほぼ完形, 長軸に穿孔1, 無文
4	15	1305	土製装飾品	北盛土	VT-97 表採	5.1	3.9	3.8	-	完形, 円筒形, 無文, 長軸中央に穿孔1
4	16	1254	土製装飾品	北盛土	VIE-94 Ⅱb層	3.0	2.1	1.4	-	扁平紡錘形, ほぼ完形, 無文, 長軸中央に穿孔1
4	17	1417	土製装飾品	北盛土	VII-99 Ⅱ層	3.2	3.1	2.1	-	球形, 表裏に凹み、無文
4	18	1350	土製装飾品	北盛土	V0-101	2.9	5.1	1.0	-	完形, 扁平長方形, 無文, 短軸一端に穿孔3
4	19	1329	土製装飾品	北の谷	VP-93 Ⅱ-2層	2.4	1.5	1.5	-	円錐形, 略完形, 長軸に穿孔1, 無文
4	20	1304	土製装飾品	北の谷	VP-94 Ⅱ層	3.0	1.6	1.5	-	完形, 円錐形, 長軸に穿孔1, 無文
4	21	1394	土製装飾品	南盛土	VII-122 Ⅲ層	(9.4)	4.1	3.0	-	斧形土製品か(刀部欠), 穿孔1, 無文
5	1	2387	土製装飾品	北盛土	VII-99 Ⅳ層	3.8	3.9	3.5	-	完形, 算盤玉形, 中央に穿孔1, 刺突文, 亀裂あり
5	2	3205	土製装飾品	北盛土	VIG-93 Ⅲ層	5.1	4.8	2.0	-	環状, ほぼ完形, 突起1(穿孔1), 同心円に刺突文を持つ文様, 穿孔2
5	3	1397	土製装飾品	南盛土	VIJ-112 カクラン	3.7	3.8	2.7	-	耳栓, 側縁小欠, 穿孔1, 刺突, 沈線
5	4	2513	土製装飾品	北盛土	VP-104 Ⅲ層	3.2	2.4	(2.3)	-	鼓形, 一部欠損, 長軸中央に穿孔, 刺突文
5	5	1681	土製装飾品	北の谷	VR-98 Ⅲ層	1.6	1.7	0.8	-	完形, 円盤状, 刺突(正面8, 裏面10), 中央に穿孔1, 側面に溝が周る
5	6	1651	土製装飾品	460土	VIJ・K-99 覆土	3.3	(3.1)	1.1	-	環状, 一部欠損, 外面全面に刺突文
5	7	1377	土製装飾品	南盛土	VII-120 Ⅱ層	3.0	3.4	3.4	-	完形, 算盤珠形, 中央に穿孔1, 側面稜に沿って刺突
5	8	4001	土製装飾品	北盛土	VR-99 Ⅱa層	3.7	3.7	0.8	-	完形, 環状, 無文
5	9	1638	土製装飾品	南盛土	VIJ-119 Ⅱ層	3.6	3.3	1.4	-	完形, 扁平楕円形, 穿孔1, 無文
5	10	1206	土製装飾品	北盛土	VII-98	3.9	3.8	3.2	-	完形, 球状, 側面に刺突2列, 中央に穿孔1
5	11	1052	三角形土製品	北盛土	VIF-102 Ⅰ層	3.5	3.3	1.0	-	完形, 三角形, 正面膨らみ, 裏面凹む, 正面に刺突文
5	12	1033	三角形土製品	南盛土	VIQ-119 Ⅱ層	(6.4)	(5.2)	1.7	-	三角形, 上端欠損, 正面膨らみ, 裏面凹む, 刺突, 沈線
5	13	1015	三角形土製品	南盛土	VIM-130 Ⅳ層	(5.8)	(5.1)	(1.7)	-	三角形, 下端欠損, 正面膨らみ, 裏面凹む, 刺突, 沈線
5	14	3805	三角形土製品	北の谷	VQ-98 Ⅱb層	4.6	5.4	1.5	-	完形, 三角形, 正面膨らみ, 裏面凹む, 正面に刺突文
5	15	1017	三角形土製品	北の谷	V0-86 Ⅱ層	4.9	5.8	1.5	-	完形, 三角形, 正面膨らみ, 裏面凹む, 沈線3, 側面に溝が周る
5	16	1085	三角形土製品	北盛土	VIC-94 Ⅰ層	3.9	4.8	1.3	-	完形, 三角形, 上端中央に僅かな突起, 正面膨らみ, 裏面凹む, 無文

図	番号	整理 番号	器種	遺構	出土地点	高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重 (g)	備考
5	17	1042	三角形土製品	南盛土	VI0-121 II層	(3.2)	3.1	1.4	-	三角形, 下端欠損, 上辺に突起1, 正面膨らみ, 裏面凹む, やや左浅い沈線
5	18	1027	三角形土製品	北盛土	VIC-90 II層	3.0	3.1	0.7	-	完形, 三角形, 正面膨らみ, 裏面凹む, 無文
6	1	1526	棒状土製品	北の谷	VQ-89 II層	5.6	2.3	2.2	-	完形, 棒状, 無文, 小口面に凹み, 小形の石棒を模倣か
6	2	1505	棒状土製品	北盛土	VIH-93 フク土	4.9	1.3	1.2	-	完形, 棒状, 無文
6	3	4079	棒状土製品	南盛土	VIQ-126 II層	3.7	0.6	0.6	-	完形, 棒状, 無文
6	4	1499	不明土製品	南盛土	VIP-119 II層	2.5	4.0	(3.4)	-	三角形土製品あるいは三脚土器に類似
6	5	3349	小形土器	南盛土	VIE-114 I層	(1.9)	6.3	-	-	片口皿形, 口縁一部欠損, 脚4(内脚1欠) 胴部:無文, 内面:ナデ
6	6	3467	小形土器	北の谷	VN-93 II層	3.2	3.2	-	-	完形, 袋形, 無文, 底部:丸底 内面:ナデ
6	7	3004	小形土器	北盛土	VN-102 IIb層	3.0	3.6	2.0	-	完形, 鉢形, 無文, 底部:平底 内面:ナデ
6	8	1197	小形土器	北盛土	VN-104 IIIa層	2.9	(11.5)	-	-	ほぼ完形, 片口形, 上面観木葉形, 基部突起欠損, 貫通孔痕跡1, 2片接合, 無文, 底部:丸底, 内面:ナデ
6	9	1126	小形土器	北の谷	VR-92 II層	6.0	6.3	(4.0)	-	台付鉢形, 口縁欠損, 無文, 底部:揚げ底 内面:ナデ
6	10	10178	土偶	2547Pit	VIQ-115 フク土	(3.9)	(7.2)	(1.8)	-	胴部下半残欠 表面:沈線, 貼付, 裏面:無文, ミガキ, 大木系か
6	11	907	土偶	621土	VMD-115 フク土	(6.8)	(6.6)	4.7	-	胴部下半残欠, 二脚の立像土偶, 片脚先に指表現5, 中央貫通孔 表面:沈線, 裏面:沈線, 貼付(臀部)
6	12	226	土偶	6163Pit	VIJ-106・ 107 フク土	(5.2)	(4.7)	(2.7)	-	頭部残欠, 表面:縄押, 貼付(眉・鼻), 刺突(目・口), 裏面:剥落 後頭部に貫通孔2(欠損)
6	13	975	土偶	9139Pit	VMD-111 フク土	6.0	4.7	1.0	-	十字形, 小形, 完形 無文, 細身, 内外面黒色
6	14	10110	土偶	10644Pit	VIA-121 フク土	(2.8)	(3.7)	(1.2)	-	十字形, 腕部残欠 表面:短沈線, 細沈線 裏面:短沈線, 細沈線
7	1	904	土偶	9620Pit	VIH-95 フク土	(16.5)	(10.4)	3.6	-	十字形, 胴部下半残欠 表面:縄押, 貼付(臍), 裏面:縄押, 中央貫通孔, 亀裂あり
7	2	238	土偶	南盛土	VIS-114 III層	(4.1)	(4.0)	(1.1)	-	十字形, 頭部・右腕欠損, 腕部に貫通孔1 表面:沈線, 貼付(乳房・臍), 裏面:沈線
7	3	564	土偶	10852Pit	VIS-127 フク土	(11.6)	(7.8)	2.2	-	十字形, 両腕・胴部以下欠損 表面:縄押, 貼付(眉・鼻・乳房), 刺突(口), 裏面:縄押, 頭頂部に貫通孔1(欠損),
7	4	301	土偶	南盛土	VIT-114 II層	(3.5)	(4.2)	6.7	-	片脚残欠(左脚か), 無文
7	5	209	土偶	南盛土	VIA-116 II層	(5.7)	(5.5)	(1.9)	-	頭部残欠 表面:刺突, 貼付(顔・眉・鼻), 刺突(目・口), 裏面:刺突
7	6	259	土偶	南盛土	VIL-133 III層	(5.9)	5.2	1.5	-	完形(頭頂部僅かに欠), 十字形 表面:沈線, 貼付(眉・鼻・乳房・臍), 裏面:沈線
8	1	236	土偶	南盛土	VIH-132 III層	(8.1)	7.4	(1.7)	-	十字形, 頭部欠損 表面:沈線, 貼付(乳房・臍), 裏面:沈線, 貼付(でん部), 芯棒痕
8	2	445	土偶	南盛土	VIE-114 III層	8.1	(2.4)	1.1	-	十字形, 両腕欠損 無文, 2片接合
8	3	749	土偶	南盛土	VIC-111 II層	(4.9)	(6.3)	1.6	-	十字形, 頭部残欠 表面:貼付(眉・鼻), 刺突(鼻), 無文 裏面:刺突, 頭頂部に貫通孔3
8	4	969	土偶	南盛土	VII-114 カクラン	6.3	(5.0)	1.5	-	十字形, ほぼ完形, 片腕先端小欠 表面:縄押, 貼付(乳房・臍), 無文, 裏面:縄押, 凹線

図	番号	整理 番号	器種	遺構	出土地点	高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重 (g)	備考
8	5	249	土偶	南盛土	VIE-114 Ⅲa層	10.6	(6.4)	2.0	-	十字形, 左腕欠損 表面: 縄文, 貼付(眉・鼻・乳房・臍), 刺突(目・口), 裏面: 縄文
8	6	10297	土偶	南盛土	VIG-116 Ⅲ層	5.0	(2.3)	1.4	-	十字形, 両腕欠損 表面: 沈線, 貼付(眉・鼻・胸), 刺突 (目・口), 無文, 裏面: 浅い沈線
8	7	715	土偶	南盛土	VIG-117 Ⅲ層	(5.8)	(6.2)	(4.0)	-	頭部残欠, 表面: 貼付(顔・耳), 刺突 (目・口), 無文, 裏面: 沈線, 縄文, 耳部 (片方欠)に貫通孔1, 後頭部に突起, 亀 裂あり
8	8	927	土偶	南盛土	VIN-132 Ⅲ層	(5.7)	(7.0)	1.2	-	右腕・胴部以下欠損 表面: 胸に凹孔, 無文 裏面: 無文, 大木系か
9	1	781・ 10118	土偶	南盛土	VIG-116 Ⅲ層 VIG-117 Ⅲ層	(8.5)	8.8	2.1	-	十字形, 胴部以下欠損 表面: 沈線, 貼付(眉・鼻・乳房), 刺突 (目・口), 裏面: 沈線 後頭部に貫通孔2(内1欠), 4片接合, 薄 手
9	2	894	土偶	南盛土	VIJ-124 Ⅱ層	(8.7)	(5.6)	2.1	-	胴部下半残欠 表面: 沈線, 貼付(乳房・臍), 裏面: 沈線
9	3	10733	土偶	南盛土	VIN-132 Ⅲ層	8.8	(3.2)	2.3	-	十字形, 両腕欠損 表面: 沈線, 貼付(眉・鼻・臍), 刺突 (口), 裏面: 無文
9	4	896	土偶	南盛土	VIJ-131 Ⅲ層	(9.1)	(5.9)	(3.6)	-	両腕・胴部以下欠損 表面: 沈線, 縄文, 貼付(鼻・乳房), 裏面: 縄文 頭に突起, 両手付け根に貫通孔1
9	5	925	土偶	南盛土	VI0-132 Ⅲ層	(7.0)	9.6	1.6	-	十字形, 胴部下半欠損 表面: 沈線, 貼付(顔・眉・鼻・目・乳 房), 刺突(口), 裏面: 沈線
10	1	10758	土偶	南盛土	VI0-133 -	(11.9)	(6.1)	2.3	-	胴部下半残欠, 二脚, 表面: 貼付(臍), 沈線(性器表現含) 裏面: 沈線
10	2	10270	土偶	南盛土	VIL-130 Ⅲ層	(10.4)	10.7	1.8	-	十字形, 胴部下部分欠損 表面: 縄押, 貼付(乳房・臍剥落) 裏面: 縄押
10	3	10766	土偶	南盛土	VIK-126 Ⅱ層	(4.1)	(4.1)	2.2	-	頭部残欠, 後頭部に貫通孔1 表面: 縄文, 貼付(顔・眉・鼻), 刺突 (目・口), 裏面: 無文
10	4	10432	土偶	南盛土	VIQ-123 Ⅱ層	(9.3)	(7.0)	(1.6)	-	十字形・頭部・左腕欠損 表面: 貼付(乳房・臍), 無文 裏面: 無文, 4片(3片接合・1片未接合)
10	5	10738	土偶	南盛土	VIQ-116 Ⅲ層	(6.8)	(4.2)	(2.9)	-	胴部下半残欠 表面: 刺突, 貼付(臍), 裏面: 刺突
10	6	10285	土偶	南盛土	VIQ-123 Ⅱ層	(6.7)	(5.7)	2.1	-	十字形, 頭部残欠, 表面: 貼付(眉・鼻), 刺突(口・鼻), 無文, 裏面: 無文

特別史跡三内丸山遺跡

研 究 紀 要

— 3 —

発行日	令和4年3月25日
発 行	三内丸山遺跡センター
編 集	三内丸山遺跡センター
	〒038-0031 青森市三内字丸山 305
	TEL 017-781-6078
	FAX 017-781-6103
印刷所	協同印刷工業株式会社
	TEL 0175-22-2231
	FAX 0175-22-0435

